

一致にありて、而かも實際政治を爲さんとするが孔子の期する所なりしと雖も、其の政見は現實に即せざるものなりしを思はざるを得ざるなり。教は政に基くものに相違なきも、政は時勢によりて改めざるべからず。此の點に於て孔子は管仲等の進歩主義者に一籌を輸すといふべし。其の平和主義は好しと雖も、其の保守主義との妥協は適當ならざりしなり。即ち孔子の專横なる惡逆者に對する處理對策は、餘りに手緩る過ぎたりといふべし。

されど史記世家を始め、多くの學者は此の事實を否定し、現に朱子の如きも、孔子が迂遠ならずして、時事に適切なる政見を有し、又た一旦魯の政に與るや、著々隨分強硬政策を實行して遺憾なかりしことを言ふ。特に古き漢學者が然かく信ずるは止むを得ずとして、新らしき學問識見を有する蟹江博士が、又大體に於て傳統の見解を取れるは意外なり。勿論史記の事實に疑を挿みしもの、既に支那にも日本にも多少なきに非ず。然るに博士は此れ等を排して、敢て自説を主張せり。博士の讀書の量は敬服に値すと雖も、其の結論は餘りに聖人の偶像化に墮せざるなきかを怪しむ。何となれば、博士は孔子が魯の相となりて、(1)少正卯を誅し、(2)三桓彈壓の政策を實行せん爲めに子路を起用し、(3)其の失敗せしによりて遂に魯を去るに至りしといふ。されど大夫が大夫を誅することは有り得べからずとの崔述の説は、少正卯は大夫ならざりしといふを以て當らずとして差支なきも、

荀子の宥坐篇によりて、長き前より危險思想を抱きて政を紊りし「聞人」として之を誅すとせしは、果して孔子の殺を嗜まざる徳政主義(顔、一九)と一致すといふべきか。元來宥坐篇は明らかに是れ純眞なる荀子の作に非ずして、老家法家に染りたる其の徒の言に外ならず。更に又少正なる官は、魯國に會て之なくして、鄭の卿の名なりとは井々の考證する所なり。少正卯の記事が、左傳にも論語にも之なきを以て、寧ろ崔述の説けるが如く、其は虛稱の人か、然らざるも孔子の注意を引くに足らざる人物なりしに非るか。此く外形的考證上よりするも、又た思想の內面的考察上よりするも、少正卯誅伐は孔子の本質と相合せざるを思ふなり。又三桓に對する強硬手段に至りても、果して左傳に傳ふるが如く、孔子が武力を以て費人の襲撃を防ぎしことも有り得しや否や。

蟹江博士は吳英の經句說に於ける見解を注意せざるに非ず、即ち費を伐つは季孫孟孫にして事足り、敢て魯公の親征を要せず、且つ費人の襲撃をして此く魯公を危殆に瀕せしむるまで急迫するに至らしむることも有り得べからずとの説は、角田九華の贊同あるに關はらず、儒者の孔子崇拜癖として、苦もなく一蹴せられたるが、此の點甚だ不明瞭と云はざるべからず。勿論吾人の此く言ふは、家語は固よりのこと、左傳の記事さへ之を疑ふこととなれども、思想内面上よりの考察上、「吾人は盡く書を信ぜば書なきに若かず」の言、之れを左傳にも應用せんとするものなり。孔子の魯を去る

の動機如何は、此所に之れを論ずるの要なきに似たれども、序ながら一言し置かんに、其の政策が失敗したる爲めなりとの一事は、魯の定公が「成」を圍みて成らざりしことが、孔子の去りし後の事實(崔述及び井井等の考證)あるに觀て正しからざるを思ふなり。

孔子は勿論無氣力者に非ず、適當の場合には、武力を用ゐる誅伐を行ふことも是認したるに相違なし。隨つて温而厲、威而不猛は其の眞面目たりしなり。されど魯國の「相」——大宰相には非ずして、單に季氏への助言者たる「相」たること崔述の考證する所——となりて、僅かに七日目に至り、忽ち斷然誅伐を行ひしことは考へ得べからず。又た自ら軍事を指揮して、魯公を危急より救ひし事は、如何にも吾人の構成し來れる孔子の概念と相一致せず。孟子は最も孔子の正系を繼げるものなるが、力を輕んじ殺戮を拒けて一路仁人の天下に敵なきを力説せり。荀子も亦た孔子の正系なるが、其の不純なる雜篇を除けば、此の點に於て孟子と異なるを見ず、其の臨武君と兵を論ずる議兵篇は之を證して餘あり。然らば孟荀の傳へたる孔子は、決して然かく刑事軍事に汲々たらざりしなり。吾人は蟹江博士の依據せし資料の批評的選擇が、精確ならざるを惜しまざるを得ず。

古來の史家は、大抵文備ある者は又た武備ありとして、聖人は人道に通達したるのみならずして、兼て武道の實演者なりとせざるなし。されど其の當世に用ゐられざることは聖人の恥辱に非ると同

時に、既に用ゐられたるにせよ、實際政治に失敗することも亦た其の徳を傷くるに足らず。「容れられずして後其の大を見る」とか、聖人の聖たる所以は、軍人たるに非ず、政治家たるに非ずして、當世を超越したる人道を知り、又た之を行ふことに徹底するにあり。軍事政事と言はず、一切俗界の諸事を醇化するは其の天職なりと雖も、必らずしも其の成功者に非ず。寧ろ聖人は不遇者たるを免れず。是れ其の道の大にして人格の高ければなり。吾人が實際政治家としての孔子の成功を否定するは、聖人としての孔子を肯定するを妨げず。

第六篇 社會生活一般

1 社會の諸類名

世

爲、三 子張問、十世可知也。

路、三 子曰、如有王者、必世而後仁。

憲、堯 賢者辟世。

季、二 孔子曰、天下有道、則禮樂征伐自天子出、

天下無道、則禮樂征伐自諸侯出、自諸侯

出、蓋十世希不失矣、自大夫出、五世希

不失矣。

同、三 孔子曰、祿之去公室、五世矣。

微、六 桀溺曰、……且而與其從辟人之士也、豈

若從辟世之士哉。

天下 (四海之内) (萬方)

里、二 君子之於天下也、無適也、無莫也、義之

與比。

泰、三 孔子曰……三分天下、有其二、以服事殷、

周之德、其可謂至德也已矣。

顏、五 子夏曰、商聞之矣、……君子敬而無失、與

人恭而有禮、四海之内、皆兄弟也。

憲、六 南宮适……曰、……禹稷躬耕、而有天下。

同、六 子曰、管仲相桓公、霸諸侯、一匡天下。

季、二 孔子曰、天下有道、則禮樂征伐自天子出、

……天下有道、則庶人不議。

微、六 夫子慨然曰、……天下有道、丘不與易也。

堯、一 (湯)曰……四海困窮、天祿永終、……朕躬有

罪、無以萬方、萬方有罪、罪在朕躬。

國、邦

學、五 子曰、道千乘之國、敬事而信。

同、二 子禽問於子貢曰、夫子至於是邦也、必聞

其政、求之與、抑與之與。

公、一 子謂南容、邦有道不廢。

同、七 孟武伯……問、子曰、由也、千乘之國、可使

治其賦也、不知其仁也。

同、七 陳文子有馬十乘、棄而違之、至於他邦、

則曰、猶吾大夫崔子也。

先、三 子路卒爾而對曰、千乘之國、攝乎大國之間、

……子曰、爲國以禮、其言不讓、是故哂

之、唯求則非邦也與、(子曰)安見方六七

十、如五六十、而非邦也者、唯赤則非邦也

與。(子曰)宗廟會同、非諸侯而何、赤也

爲之小、孰能爲之大。

路、二 子曰、善人爲邦百年、亦可勝殘去殺、

誠哉、是言也。

憲、一 憲問恥、子曰、邦有道穀、邦無道穀恥也。

同、四 子曰、邦有道、危言危行、邦無道、危行

言孫。

衛、五 子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦、行矣、

言不忠信、行不篤敬、雖州里、行乎哉。

同、六 子曰、直哉史魚、邦有道如矢、……君子哉

蘧伯玉、邦有道則仕、邦無道則可卷而懷

之。

同、二 顏淵問爲邦、子曰、行夏之時。

季、一 夫顯與、……在邦域之中矣。

張、三 子貢曰……夫子之得邦家者、所謂立之斯

立、道之斯行。

社稷

先、三 子路曰、有民人焉、有社稷焉、何必讀

書、然後爲學。

季、一 夫顯與、昔者先王以爲東蒙之主、且在邦域

之内_二矣、是社稷之臣也、何以伐爲。

鄉黨

雍、四 子曰、毋、以與_二爾鄰里鄉黨_一乎。

路、三 子曰、宗族稱_レ孝焉、鄉黨稱_レ弟焉。

憲、四 闕黨童子將_レ命。

衛、五 子曰、雖_二州里_一行乎哉。

家

公、八 子曰、求也、千室之邑、百乘之家、可_レ使_レ爲_二

之宰_一也、不_レ知_二其仁_一也。

顔、三 在家必聞。

2 社會變遷の理法

爲、三 子張問、十世可_レ知也、子曰、殷因_二於夏禮_一、

所_二損益_一可_レ知也、周因_二於殷禮_一、所_二損益_一可_レ

知也、其或繼_レ周者、雖_二百世_一可_レ知也。

侑、九 子曰、夏禮吾能_レ言_レ之、杞不_レ足_レ徵也、殷禮吾

能_レ言_レ之、宋不_レ足_レ徵也、文獻不_レ足_レ故也、足

則吾能_レ徵_レ之矣。

雍、二 子曰、齊一變、至_二於魯_一、魯一變、至_二於道_一。

路、二 子曰、苟有_二用_レ我者_一、期月而已可也、三年有

成。

同、二 子曰、善人爲_レ邦百年、亦可_レ以勝_レ殘去_レ殺矣、

誠哉、是言也。

路、三 子曰、如有_二王者_一、必世而後仁。

季、二 孔子曰、天下有_レ道、則禮樂征伐自_二天子_一出、

天下無_レ道、則禮樂征伐、自_二諸侯_一出、自_二諸

侯_一出、蓋_二十世_一希_レ不_レ失矣、自_二大夫_一出、五世

希_レ不_レ失矣、陪臣執_二國命_一、三世希_レ不_レ失矣、

天下有_レ道、則政不_レ在_二大夫_一、天下有_レ道、則

庶人不_レ議。

同、三 孔子曰、祿之去_二公室_一五世矣、政逮_二於大夫_一

四世矣、故夫三桓之子孫微矣。

「世」には少くとも三義あり。(1)は「路、一一」孔安國の註に、「三十年を世と曰ふ。如し命を受

けて王たる者あらば、必らず三十年にして仁政乃ち成る」とある是れなり。「季、二、三」亦た同じ。

(2)は、朱子が「王者が姓を易へ、命を受くるを一世と爲す」如し。されど徂徠は、其は一世に非ず

して一代なりとし、父子相受くるを一世なりとせり。何れにせよ、此は或る人の一定の期間を意味

す。然るに(3)は廣く社會一般を意味す。仁齋が「憲、三九」に註して、「世とは一世を擧げて言ふ」

とせる是れなり。唯だ此の章の意義は、人々により異解あり、隨つて「世」の字の意義も同一なら

ずと雖も、「微、六」に於て、長沮が「世を辟くるの士に従ふに若かん哉」と言へる「辟世」の世は

今の厭世の世と同じく廣く社會の意義なり。

「天下」の概念は、帝王の支配下にある社會全部を指す。即ち、「泰、二一〇」「憲、六、一八」「季、

二」「微、六」等の其れ即ち是れなり。されど又た當時の最も廣き社會、有らん限りの人の群を意味

するらしき「里、一〇」の如きあり。「四海」或は「四海之内」といふも亦た異名同義と見るべきな

り(顔、五)(堯、一〇)。

「社」とは、もと土地の神を祭るもの、「稷」とは穀の神を祭るものなり。白虎通に、「土地廣博、

徧く敬すべからず。五穀は衆多、一々にして祭るべからず。土を封じて、社を立つるは土あるを示

すなり。稷は五穀の長なるが故に、稷を立てて之を祭る也」とあり。此くて社と稷とを合せて侯伯所領の封域、即ち國家を意味することとなる。朱子が「社稷とは猶ほ公家といふがごとし」と註せるは之れが爲めなり。

「國」或は「邦」も、又た侯伯所領の社會なり。其れに、馬融は、「周禮によりて、六尺を歩と爲し、百歩を畝と爲し、百畝を夫となし、三夫を屋と爲し、三屋を井と爲し、十井を通と爲し、十通を成と爲し、成は革車一乗を出す、千乗の賦を出すは千成の地に居るものにして始めて能くする所にして、大國をいふ」とし、包氏は、「王制によりて、古は方里を井となし、十井を乘と爲す、百里之國は適に千乘なり」とす。朱註には、「唯だ諸侯之國、兵車千乗を出す可き者なり」といふ。徂徠は、「萬乘、千乘、百乘は皆古言にして、天子を謂うて萬乘となし、諸侯を千乘と爲し、大夫を百乘と爲すは、其の富を語るなり」とす。理由の基く所は、稍や相異ると雖も、萬乘が天子の封域、千乗が諸侯の其れにして、又た國なることは皆な一致せる所なり。

「郷黨」或は「州里」が、國以下の小社會たること、并に「家」が、又た其れ等以下の小社會なること、更に説明を須るざる所なり。

右は單に廣さの點より、社會の種類を分ちたるものなるが、此所に重大なるは、其れ等に一定の

發展ありや否や、孔子が如何に之れを見しかの問題なり。「爲、二三」の「其れ或は周に繼ぐ者は、百世と雖も知るべきなり」の言に徴すれば、世代變すと雖も、前後相繼ぐ者の間には、一定の法則ありと爲せるが如し。「雍、二四」の、齊は一進歩して魯に至り、「魯は一進歩せば道に至らん」の言も、亦た同一趣旨を語るに似たり。随つて進歩の道に反すれば、退化の外なくして、其れにも亦た一定の法則あるを説く。「季、二」及び「季、三」は、即ち是れなり。

孔子の國家興亡盛衰の法則を説くは明細ならずと雖も、其が人間の意志に反して、必然に行はるる自然法に非ずして、爲せば如何様にも爲し得る理想法たることは其の確信せる所たり。されば王者が治を爲せば、三十年にして仁政成る（路、一二）とも、又た善人邦を治むれば百年にして殘に勝ち殺を去るべし（路、一一）とも云へり。此れ等の二言、王者と善人との間、其の治績の效果に大相違ありて頗る如何はしと見られるれども、何れも孔子が古言に基きての言として解説せらる。何れも深く拘泥すべきに非るなり。「路、一〇」の意義に至つては、頗る曖昧にして諸家解を異にす。衛の靈公が、己れを用るざるに憤慨しての言なりと見るものありと雖も、兎にも角にも「三年にして成す有らん」は極端と言はれざるに非ず。要するに、子路篇の如き、果してよく孔子の言を忠實に記述せるものなるや否や、甚だ疑はしきなり。唯だ孔子が道には進み行くべき一定の次第ありて、其は一に人意

の勉強如何によると考へたるは疑なし。

最後に最も廣き意味にての社會の價値づけに就き、孔子は如何に之を爲せしか。是れ老子の厭世に對して興味ある問題なり。而して孔子が當世に容れられず、悲嘆の情を洩らし、又た或る程度まで隱者に對して同情を寄せたるは事實なり。されど孔子は決して隱者たらんとせざりしは、其の顯著なる特色なり。如何に冷遇せられたりとは云へ、尙ほ鳥獸とは群すべからずとして、飽くまで冷遇する人々と共に與にせんと、百方改善の方途を講ぜんと努力したるは、孔子の一生なり(微、六)。「憲、三九」には、賢者辟世の言に就ては別に説く所あり。孔子に悲觀的感傷あり、隨つて論語の中、厭世主義的言辭なきに非ずと雖も、其の老子の徒に非ること、隱者に對せし態度最もよく明證する所なり。

3 人物鑑定

爲、一〇 子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉。
公、一〇 子曰、始吾於人也、聽其言而信其行、今吾於人也、聽其言而觀其行、於予與改

是。
衛、二〇 子曰、衆惡之必察焉、衆好之必察焉。
同、三三 子曰、君子不可小知、而可大受也、小人不可大受、而可小知也。

路、二四 子貢問曰、鄉人皆好之、何如、子曰、未可也、鄉人皆惡之、何如、子曰、未可也、不

憲、三三 子貢方人、子曰、賜也賢乎哉、夫我則不暇。
衛、二五 子曰、躬自厚、而薄責於人、則遠怨矣。

里、三三 子曰、惟仁者能好人、能惡人。
同、六 子曰、我未見好仁者、惡不仁者、好仁者無以尚之、惡不仁者、其爲仁矣。
顏、二六 子曰、君子成人之美、不成人之惡、小人反是。

同、二〇 子曰、衆惡之、必察焉、衆好之、必察焉。
陽、二四 子貢曰、君子亦有惡乎、子曰、有惡、惡人之惡者、惡居下流而訕上者、惡勇而無禮者、惡果敢而窒者、曰、賜也亦有惡乎、惡微以爲知者、惡不孫以爲勇者、惡訐以爲直者。

同、三 樊遲……曰、敢問崇德脩慝辨惑、子曰、善哉問、先事後得、非崇德與、攻其惡、無攻人之惡、非脩慝與、一朝之忿、忘其

惡、訐以爲直者。

何人も自己の主觀によつて人を上下せざるなし。されど正しく人の價値を鑑定するは頗る難し。蓋し人々は行爲の外形に捕はれて、其の内面を看破するの知力なく、或は其れあるも、然なす勞を取らざればなり。善き言葉を發する人、必らずしも善き人に非ざれば、其の言を聽いて直に其の人を信すべからず(公、一〇)。或は一見善らしき行を爲せる人、必らずしも善なる行を爲せるに非ること

あり。外形より見て同じ行も、其の行の由て生じ来る心次第にては價值の同じからざることあり。親切は善なるも、然なさんとする意志なくして偶然親切らしくなり來りたる行爲は善ならず。又たいよく眞に然なさんとする意志ありとするも、何故に親切するに至りしかの底意を確かめざれば眞正なる親切とは言ひ難し。例へば、入水の人を救助せし親切も、實は其の人を自己の爲めに利用せんとの醜き底意ありたりとせば、之れを善人なりとするは輕卒ならずと爲すべからず。是の故に人を論評せんとならば、外形の動作より、次第に其の果して意志ありての行爲なりや否や、いよく行爲なるにせよ、果して行爲の動機が善なりや否やと、深く内面の洞察を爲さざるべからず。「爲、一〇」の「所以(爲)」は外形なり。「所由」は意志なり、而して「所安」は動機なり。かくて見る作用の外より内に入るに従つて「視」「觀」「察」の文字を用ゐて其の深淺を示せり。孔子の人物鑑定の方法や正確なりといふべし。故に確信を以て之れを斷言し、人焉ぞ度さんやと連呼せるは當然なり。されば大人の爲す所は、深き奥底あれば、一部を一見したるのみにては、之れを知り難きも、是れ其の大に責任を取り得る所以なるが、小人は淺薄なれば、却つて輕く之れを見、又た従つて負はしむべき責任も重からしめざるを要す(衛、三三)。

人物鑑定の困難上述の如し。もし大事を成せる大人を精しく知らんと欲すれば、其の隠れたる複

雜極まる内心の神祕は、殆んど知り得べからずとも言ひ得べし。否な、大人ならずとも、直接に知る由もなき其の内面の讀み難きは、想像以上なるを知らざるべからず。精確誤りなきを期せんとならば、寧ろ測定不可能ともいふべきなり。然るに子貢は好んで人を上下品評す。是れ孔子が彼れを「賢なる哉」と皮肉りたる所以なり。如何に他人の心を窺ひ難しとするも、其の生活の始終を研究する以上は、其は必らずしも爲し難きに非すと雖も、其の非常なる時日を要するは勿論なり。而るに公務上交際上必要なる人に就ては兎に角として、然らざる人々に就ては、然る十分なる研究を爲し得ざるは固よりなり。故に孔子は「夫れ我れは即ち暇あらず」と戒しめたり(憲、三二)。

されば毀譽褒貶は、自らも漫りに爲すべからざると同時に、他人の批評も亦た輕々しく信すべからず。人の好評も惡評も、其の儘直に之れを盲信せず(衛、二七)、必らずよく自ら判斷すべしとす(衛、二七)。唯だ此所に郷人の善なる者が好む人物なれば、善人となすべしとす(路、二四)。而して他人の善惡いよく明白となりても、口に出して之れを毀譽するは慎しむべく、其は一に教育的意義を有せざるべからず(衛、二四)。

さればと言うて、君子は更に人を好み、或は惡まざるに非ず。或は人の惡を吹聴し、或は下に居て上を譏り、或は勇に任せて禮を無みし、正理を辨へずして猛進する者など、孔子の惡むべしとす

るところ、或は邪推して知ありとし、或は不孫にして勇ありとし、或は人の秘密を摘發して直なりとする如きは、子貢の惡む所なり(陽、二四)。此れ等は凡そ惡むべき事の凡てに非すと雖も、世に毀るべく、譽むべく、好むべく、惡むべき人物の之れあるは疑ふべからず。唯だ之れを爲して正しきを得るは、修養ある者に非れば能はざる所にして、孔子は「仁者にして始めて能く人を好み、人を惡み得」とす(里、三)。亦た以て正しく人を好み或は惡むことの容易ならざるを知るべきなり(里、六)。然るに世人は多く此の點を輕視し輕行す。是れ修養の成らざる所以なり。されば修養は、先づ厚く自己の惡を攻めて、薄く人の惡を攻むる(衛、一四)を以て、己れの根本惡、即ち慝を療治する所以なりとす(顔、二一)。

4 交際上の諸注意

- 學、八 子曰……無友不若己者。
- 同、三 有子曰、信近於義、言可復也、恭近於禮、遠恥辱也、因不失其親、亦可宗也。
- 公、二七 晏平仲善與人交、久而敬之。
- 雍、二四 子游爲武城宰、子曰、女得人焉爾乎、曰、有澹臺滅明者、行不由徑、非公事、未嘗至於偃之室也。
- 雍、三 子曰、中人以上、可以語上也、中人以下、不可以語上也。
- 同、二六 子見南子、子路不說、夫子矢之曰、予所

否者、天厭之、天厭之。

述、三 陳司敗問、昭公知禮乎、孔子曰、知禮、孔子退、揖巫馬期而進之曰、吾聞君子不黨、君子亦黨乎、君取於吳、爲同姓、謂之

吳孟子、君而知禮、孰不知禮、巫馬期以告、子曰、丘也幸、苟有過、人必知之。

泰、二〇 子曰、好勇疾貧、亂也、人而不仁、疾之已甚、亂也。

罕、三 子曰、可與共學、未可與適道、可與適道、未可與立、可與立、未可與權。

路、三 子曰、君子和而不同、小人同而不和。

同、二五 君子易事、而難說也、說之不以其道、不說也、及其使人也、器之。

憲、二 或曰、以德報怨、何如、子曰、何以報德、以直報怨、以德報德。

憲、二 原壤夷俟、子曰、幼而不孫弟、長而無述焉、老而不死、是爲賊、以杖叩其脛。

衛、七 子曰、可與言而不可與言、失人、不可與言而與之言、失言、知者不失人、亦不失言。

同、二五 子曰、躬自厚、而薄責於人、則遠怨矣。

同、三 子曰、君子矜而不爭、群而不黨。

同、二九 子曰、道不同、不相爲謀。

季、六 孔子曰、侍於君子、有三愆、言未及之而言、謂之躁、言及之而不言、謂之隱、未見顏色而言、謂之瞽。

陽、一 陽貨欲見孔子、……謂孔子曰、來、予與爾言、……孔子曰、諾。

同、二〇 孺悲欲見孔子、孔子辭以疾、將命者出戶、取瑟而歌、使之聞之。

交際上の注意は頗る多々なるも、其は各部門に於て述ぶる所あるを以て、此所には唯だ孔子の其れに就て單なる儀禮をも輕んぜざりし點を論じおかんとす。蓋し人は社會より離るべからず、又た離るべきに非ず。「吾れ斯人の徒と與にするに非んば、誰れと與にかせん」(微、六)なれば、其れとして人々は互に相和せざるべからず、唯だ無意義に同ぜざるのみ(路、二三)。群せざるべからず、唯だ徒らに黨せざるのみ(衛、二三)。もし始めより相互に進まんとする針路を異にする者に對しては、強て其の爲めに謀るも無益なれば、然る愚策を取らるべからず(衛、一四)とす。是れ大體論上よりの眞理なり。されど現代の意識より言へば、其れにも自ら範圍程度ありて、同一事同一時に道の同じきと同じからざると之あるの一事忘るべきに非ず。例へば同一會社員としては利害相同じく、個人としては感情相異なる場合も有り得るなり。此の時私情の爲めに會社の利害を疎にするは許すべからず。此かる同と異との認識を深め行くは、即ち此かる認識の時代的一進歩なりといふべし。されど惡人友を擇ぶ場合多くは自己の意に合ふ者のみを取る傾向ありと雖も、是れ相率ゐて墮落に赴くの嫌あり。己れ以上の者をと期せざるべからず(學、八)。而して友に對する心得完全なれば、其の交は永續し得(公、一七)。約束も正義に近く應接態度も禮儀に違はず、仲間とする所も親しむべき者たるを失はざれば他の尊敬を博するに足る(學、一三)。人には互に過失あるを免れず、他人の其れは大

目に見て自己のは大に警戒すれば人に怨まれることなし(衛、一五)。尙ほ人の關係には同等の外種々の別あれど交際上公私は判然と相別つべく(雍、一四)、上下には又た其れ々の注意あるべし。總じて下には寛大にして、上としては人の上手言葉に乗るべからず(路、二五)。中人以下に上の事を語り、中人以上に下の事を語るは共に機宜を失す(雍、二二)。一言を發するにも對手と場合とを考ふべく宜しきを得ざるべからず(衛、七)。

されば談話術につき普通三の失態あり(季、六)。君上は最も尊貴のものなれば之れを傷くるが如き言辭はたとへ事實なりとも避くるを要す(述、三〇)。されど惡人と雖も亦た全く之れを唾棄して對手とせざるは穩當ならず。南子の如きも、其の望とあらば、見えんとしたるが孔子なり(雍、二八)。且つ惡人と雖も、亦た同じく社會の人なれば、其の罪を惡むも其の度を超ゆべからず。然かなすは惡人をして更に惡ならしむるの惡事なり(泰、一〇)。汝の敵を愛せよとはクリストの説く所、怨に報ゆるに徳を以てせよとは老子の教なれども、孔子の害惡に對する愛はさまで深刻ならず。唯だ怨に報ゆるに徳を以てせずと、其れにさへ直を以て交るべし(憲、三六)とす。原壤の如き惡人に對しては、體罰をさへ加へたりとも解し得べきも、其れにせよ、結局惡人をも善に導くの意志を以て、之れを遇するを主とし、決して同胞として之れを愛するを忘れざるを本旨と見るべきなり。又た普通の誠

意なき不所存者に對しては、托辭を設けて單なる儀禮を以て對せしこと(陽、二〇)も之あり。即ち誠意の伴はざる一片の儀禮も、淺く薄き社交の間に於ては、免るべからざるを見るなり。此く實際に就ては、よろしく深淺厚薄を精査して、各之れに適當したる態度を以て接せざるべからず。「罕、三一」は種々異解ある所なるも、此の意義を言明せるは明らかなり。

5 位 (貴賤)

- 里、五 子曰、富與貴、是人之所以欲也、不以其道得之、不處也、貧與賤、是人之所以惡也、不以其道得之、不去也。
- 同、四 子曰、不患無位、患所以立、不患莫己知、求為可知也。
- 述、五 子曰、不義而富且貴、於我如浮雲。
- 泰、三 子曰、邦有道、貧且賤焉、恥也、邦無道、富且貴焉、恥也。
- 顏、五 子夏曰、商聞之矣、富貴在天。
- 憲、七 子曰、不在其位、不謀其政。
- 憲、六 會子曰、君子思不出其位。
- 衛、三 子曰、臧文仲其竊位者與、知柳下惠之賢、而不與立也。
- 季、三 齊景公有馬千駟、死之日、民無德而稱焉、伯夷叔齊餓于首陽之下、民到于今稱之。
- 進退
- 雍、九 季氏使閔子騫為費宰、閔子騫曰、善為我辭焉、如有復我者、則吾必在汶上矣。
- 述、二 子謂顏淵曰、用之則行、舍之則藏、惟我與爾有是夫。

泰、三 子曰、三年學不至於穀、不易得也。
同、三 危邦不入、亂邦不居、天下有道則見、無道則隱。

陽、五 公山弗擾以費畔、召、子欲往、子路不說曰、末之也已、何必公山氏之之也、子曰、夫召我者、而豈徒哉、如有用我者、吾其為東周乎。

罕、三 子貢曰、有美玉於斯、韞匱而藏諸、求售賈而沽諸、子曰、沽之哉、沽之哉、我待賈者也。
憲、四 子曰、邦無道、危行言孫。
同、堯 子曰、賢者辟世、其次辟地、其次辟色、其次辟言。

同、七 佛肸召、子欲往、子路曰、昔者由也聞諸夫子、曰、親於其身、為不善者、君子不入也、佛肸以中牟畔、子之往也、如之何、子曰、然、有是言也、不曰堅乎、磨而不磷、不曰白乎、涅而不緇、吾豈匏瓜也哉、焉能繫而不食。

衛、六 子曰、君子哉蘧伯玉、邦有道則仕、邦無道則可卷而懷之。

微、二 柳下惠為士師、三黜、人曰、子未可以去乎、曰、直道而事人、焉往而不三黜、枉道而事人、何必去父母之邦。

陽、一 陽貨欲見孔子、孔子不見、歸孔子豚、孔子時其亡也、而往拜之、遇諸塗、謂孔子、曰、來、予與爾言、曰、懷其寶而迷其邦、可謂仁乎、曰、不可、好從事而亟失時、可謂知乎、曰、不可、日月逝矣、歲不我與、孔子曰、諾、吾將仕矣。

同、四 齊人歸女樂、季桓子受之、三日不朝、孔子

行。

微、七 子路曰、不仕無義、長幼之節、不可廢也、

逸、隱居放言、身中清、廢中權、我則異、於是、無可、無不可。

君臣之義、如之何其廢之、欲潔其身、而

微、一〇 周公謂魯公曰、君子不施其親、不使大

亂、大倫、君子之仕也、行其義也、道之不

臣怨乎不以、故舊無大故、則不棄也、無

行、已知之矣。

求備於一人。

同、八 逸民伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、

張、三 子夏曰、仕而優則學、學而優則仕。

少連、子曰、不降其志、不辱其身、伯夷

同、九 孟氏使陽膚爲士師、問於曾子、曾子曰、上

叔齊與、謂柳下惠、少連、降志辱身矣、言

失其道、民散久矣、如得其情、則哀矜而勿

中倫、行中慮、其斯而已矣。謂虞仲、夷

喜。

「貴」とは高き位なり。而して位は當路者の意志によりて定まる。當路者正しければ、正しき人を採用し、正しからざれば諂佞不才の者を登用す。随つて有徳有能者より之れを見れば、貴き位は偶然的のものたるを免れず。故に、其は天に在りと言はる(顔、五)。随つて眞の貴きより云へば、世俗の所謂貴きは貴きに非るなり(泰、一三)(述、一四)。

人は唯だ自己の實力實價を充實して、敢て位の有無を以て喜憂すべからざるなり(里、一四)。されど一旦位を得たる以上は、謹んで其の分を守り(憲、二七、二八)、自己の私情によりて、公の爲めに善人

を擧ぐる等の責任を怠るべからず。是れ臧文仲が柳下惠を推舉せざりしが爲め、位を竊めりと言はるる所以なり(衛、一三)。

孔子は固く門弟に向つて、輕々しく官位を得ることを戒しめたり。之れに戀々たらざるを推奨せり(雍、九)(泰、一二)。其の意蓋し修養の最上目的は、各自の内面にあるが爲めなり。是れ故に、當局が我れを用うれば道を行ふも、もし用るざれば之れを我が内面に藏し置きて悠々たるべしといふなり。而して此かる境地に有り得るものは、弟子の中には獨り顔回あるのみとしたり(述、一〇)。更に當時の官界の人としては、蘧伯玉の如く邦に道あれば出で、道なければ退く(衛、六)が、孔子の賢としたる所なり。されば孔子の道は全く仕官に未練なきものかといふに、決して然らず(張、一三)。本來道は實踐的のもの、之れを運用してこそ、其の眞光輝を發するものたるは、孔子もよく之れを認めたり。故に「我れは賈を待つ者なり」といふ(罕、一二)(陽、七)。唯だ孔子を買ふ者なきを如何にせん。

賣るべき物あれども買ふ人なし。是れ其の物の價值なきが爲めに非ず。寧ろ反對に顔回の言の如く、夫子之道の至つて大なるが爲めに他ならず。されど事實上賣れざる一事は疑ひなし。孔子のみならず、其の門弟等も、其の師の教訓を守る限り、當世に其の地位を得る能はざるは勿論なり。

我れ實は貴く、彼れ眞に不徳亂暴にして、我れを用ゐざるのみならず、場合によりては害をも加へまじき危険なる情態にある時、内實己れの行を高くして、外面は謙遜なる言動を爲す(憲、四)(陽、一)。是れ害を免れんが爲めには、止むを得ざる所なりしならんも、亦た餘りにも消極的態度ならざりしか。如何に孔子と雖も、此くては不平失望の言も出づべき筈なり(述、一五)。「鳳鳥到らず、河は圖を出さず」の歎、或は「我れ言ふ勿らんと欲す」など、當然なりといふべし。されど此かる悲憤慷慨の言も、畢竟當路者をして反省せしむるに足らずとすれば、有道者の道を行ひ得る望は永久に來らざるなり。蓋し當路者とは即ち權力者にして、一に其の意志によつて、萬事を獨斷し、最も道を以て己れを規範せらるるを嫌へばなり。是の時に當り、孟子の如く天下の英才を得て之れを教育し、師弟の一團が、當世とは全然別個の理想社會を建設するも一方法に相違なきも、其の權力者を動かす力なきは相同じ。

不徳亂暴の權力者に對して、孔子は如何に考へたりしか。彼は強く我れは弱きが故に、力を以て争ふ能はざるは固よりなりと雖も、もし之れを動かし得る力の發動ありとせば、之れを助けんか、將た抑へんか。換言、革命の是非論に就て、孔子は考へしことなきか。論語に見ゆる限り、孔子は武王の樂よりも、舜の樂(韶)を善しとする外、忠君の心極めて純正なり。唯だ二三反亂者の招きに應

ぜんとたる如きも(陽、五七)、是れ諸家によりて其の眞偽の疑はるる所なり。唯だ春秋に於ては必ずしも革命を否定せざるを見たるのみ。蓋し周道の恢復こそ、孔子の唯一の所願にして、當時尙ほ其の不可能を想はざりしならん。然るに戰國時代に至りては、其は既に生きたる問題に非ずして、革命の機運は澎湃として復た止むべからざる實情なりしを以て、孟子も荀子も道理上之れを肯定したり。道の古來相傳の道たるは争ふべからざる所なるも、其の扶持實現者は既に周室に非ずして、他の強者なりしなり。唯だ其の強者が仁者なるべきか、否かが問題たりしのみ。孔子は尙ほ權力者の正體を見究めず。故に其の革命思想は頗る微弱なりしなり。されど權力者なる者は、往々にして有道者に味方する者も之れ無きに非ずと雖も、事實上多くは是れ、韓非が道破せしが如く、自恣專權を極めたる者なり。之れに向つて道を説き、道を行はしめんと欲すれば、單に消極的態度に出る限り、百年河清を待つものなり。もし此の絶望情態を打破せんとならば、蘧伯玉の如くなるべからず、或は甘言を以て喜ばせ、或は方便を以て瞞著もせざるべからざること、是れ又た韓非のよく説きし所なり。少くとも柳下惠の如く(微、二)、「孟子萬章下」に見ゆる伊尹の如く幾分積極的工作を施さざるべからず。「微、八」に於ける柳下惠の評價は、聊か之れを肯定する傾向ある如きも、此れ等の章は恐らく異解に富む所、且つ此の點は孟子と雖も徹底する能はざりし所なり。畢竟儒家者

流は、其の道の社會的にして厭世的ならざること、隱者等と大に異なる（微、七）と雖も、其の實行的手段の缺乏は隱者と大差なきを見るは、其の根源孔子にありと言はざるべからず。君主を尊むは可し、又た革命を説かざるは穩當なりと雖も、暴君の暴を合理化するの研究なく、随つて方術なく、其の結果は暴を以て暴に易ふるの愚を反復して止まざりし支那歴史を展開するに至りしに非るか。道と權力との全然の絶縁の、如何に恐るべきかを知るなり。

史記によれば、夷齊は、君は君たらずと雖も臣は以て臣たらずと雖も、武王を諫めたりといふ。此の事實は疑ふべし。されど少くとも、此かる思想も有り得べし。同様に、父父たらずるも、子は子たるべく、友は友たらずるも、我は友たるべき理由も之なきに非すと雖も、其は然か爲すことによりて、却つて我が目的を達し得る場合のことにして、絶對の眞理には非ず。權力者の横暴は、弱者が施し得る方法を盡して、之れを抑制せんとするは、無謀なる革命を豫防する所以ならずんばあらざるなり。

6 名譽 (「名聞」、「毀譽」等)

學、二 子曰、不患人之不己知、患不知人也。

里、五 子曰……貧與賤、是人之所惡也、不以

其道得之不去也、君子去仁、惡乎成名。

里、四 子曰、不患無位、患所以立、不患莫

已知、求爲可知也。

泰、一 子曰、泰伯其可謂至德也已矣、三以天下

讓、民無得而稱焉。

罕、二 達巷黨人曰、大哉孔子、博學而無所成名。

同、三 後世可畏焉、知來者之不如今也、四十五

十而無聞焉、斯亦不足畏也。

顔、二 子曰、君子成人之美、不成人之惡、小人

反是。

同、二 子張問、士何如、斯可謂之達矣、子曰、何

哉、爾所謂達者、子張對曰、在邦必聞、

在家必聞。子曰、是聞也、非達也、……夫

聞也者、色取仁而行違、居之不疑、在邦必聞、在家必聞。

憲、一 憲問恥、子曰、邦有道穀、邦無道穀、恥也。

同、三 子曰、古之學者爲己、今之學者爲人。

同、三 子貢方人、子曰、賜也賢乎哉、夫我則不暇。

同、三 子曰、不患人之不己知、患其無能也。

衛、八 子曰、君子病無能焉、不病人之不己知也。

同、九 子曰、君子疾沒世而名不稱焉。

同、二 子曰、吾之於人也、誰毀誰譽、如有所譽者、其有所試矣、斯民也、三代之所以直道

而行也。

「名譽」とは他人より與へられたる我が價值なり。換言、他人の我に對する價值づけなり。其の價值づける作用は、即ち好惡、是非、毀譽、褒貶等と呼ぶ。而して此の作用によりて成れる結果は、即ち名譽不名譽なり。此くて富は物質的價值なるが如く、名譽は無形の價值、即ち富なりとい

ふを得。随つて何人にあつても之れを輕視するを得ざるなり。されど人々の我れに加ふる批評は、必らずしも正しからず。或は誤ることも少からず。是れ世俗の輕薄なる所以なれども、世間の我を見る所は事實上此くあるを如何にせん。即ち名譽は、或は人の實力實價以上に買ひ上げられ、或は其れ以下に踏み倒さるるを免れず。此の際に處して如何にすべきや、此所に道德問題を生ずるなり。

孔子は既に富を重んじ、又た位を重んじたと同じく、又た名譽を重んじたり(學、二二)(衛、一九)。されど世俗の評價は輕薄なるが故に、此は正しき名譽ならずして「聞」なれば、善惡ともに之れを重視すべからず、寧ろ之れに拘泥せず、專心實力實價の養成に努むべしとす(學、一六)(里、一四)(憲、三二)(衛、一八)。唯だ求むべきは、道即ち仁に従つて得らるる名譽に外ならず(里、五)。「大哉」の孔子さへ博學にして名を成さざりき(學、二)。此くて俗譽に對する戒心の程度は、遂に嵩じて無名無稱を最高道德なるが如くに説かんとする傾向あり(泰、一)。此は恐らく或は後の門流によつて、老子教に導き入れられたる所以ならんと雖も、本來孔子の本意にはあらざるべし。

何故に世間は輕薄なるや。其は一には其の認識不足により、又た一には好惡利害による。前者は人物鑑定の困難よく之れを語る。後者に至りては人々の日常に於て痛切に體驗し實行する所なり。即ちヒイキ、ヒイキの別るるは免れざる所なるのみならず、特に諂佞は、己れを利し、直言は人

を怒らすを以て、少くとも人の面前にて其の價値を買ひ上ぐるは己れに利益あり。たとへ其れが正しくとも、他を皮肉るは己れを損す。有りもせぬ他人の價値を買ひ上ぐるは我が良心を偽りての言明に外ならざるを以て、一たび其の人の在らざる場合は、寧ろ嚴酷に他人を罵倒するが、又た所謂世間の普通事ならざるべからず。然るに君子のみは、此かる淺ましきことを爲さずして、人の美あれば其れを守り育てんとして、其の惡しき所は増長せしめざらんとすべし(顔、一六)。洵に人の名譽を減じさせ、損じさせるは人の富を竊むにも増しての罪惡なるに反し、人の善を成り立たすは慈善救世の善業ともいふべけれども、大なる修養ある者に非ざれば能はざる所にして、天下は滔々として、善惡ともに誤まれる名譽に汚濁せらるるに至るなり。

當然有るべき人に名譽なく、無かるべき人に其れあり。孟子は「聲聞の(實)情に過ぐるは、君子之を恥づ」と言へり。是れ固より孔子の意に外ならず。認識の不足と多數の利害の一致する場合、或る人が遙に實價以上の名譽を得ることあり。マンデヴィルの道破せし如く、政治家は這般の事實を利用するものなるが、孔孟は嚴しく此かる瞞著手段を拒けたり。されど日常普通の場合、此かる患は極めて少くして、人々は寧ろ與ふべき名譽を與へざるを常とす。孔子は弟子の修養のためならんも、餘りにも無造作に之れを斷念せしめんとせるが、本來人は富と同じく名譽を重んぜざる能はず。

何となれば、其れ等は或る程度まで生活必須の條件なればなり。虚名にせよ、正名にせよ、名譽あればこそ立ち行き、然らざれば成り立たざるは、商業及び政治家のみに限らざるを見れば、勿論實力實價の養成を怠らざると同時に、己れに名譽なくば其れあらしめ、悪名あらば之れを正し、令名あらば益々之れを育て行くの道を謀るを可とすべし。然るに、無造作に名譽心を抑制するの結果は、或は老子教に接近するか、否らざれば言動に表裏ある偽善者を生ずるの弊なき能はず。是れ支那のみならず、我が儒家者流間にも存せし所なるを思ふなり。換言、名譽に關する論語の教訓は、餘りにも修養の點に偏せりと云はざるべからず。

7 國家的諸事態

當時の國情

先、一 子曰、先進_二於禮樂、野人也、後進_二於禮樂、君子也。
路、二 子貢問曰、……今之從_レ政者何如、子曰、噫、斗筭之人、何足算也。
憲、堯 子曰、賢者辟_レ世。

衛、三 子曰、吾猶及_二史之闕文_一也、有_レ馬者借_レ人乘_レ之、今亡矣夫。
陽、六 子曰、古者民有三疾、今也或是之亡也、古之狂也肆、今之狂也蕩、古之矜也廉、今之矜也忿戾、古之愚也直、今之愚也、詐而已矣。
同、六 子曰、惡_二紫之奪_レ朱也、惡_二鄭聲之亂_レ雅樂_一。

也、惡_二利口之覆_レ邦家_一者。

微、九 大師擊適_レ齊、亞飯干適_レ楚、三飯繚適_レ蔡、四飯缺適_レ秦、鼓方叔入_二於河_一、播鼗武入_二於漢_一、少師陽、擊磬襄入_二於海_一。

宿諾。
訟
顏、三 子曰、聽_レ訟吾猶_レ人也、必也使_レ無訟乎。
刑(賞)
刑

法

罕、三 法語之言、能無_レ從乎、改_レ之爲_レ貴。
先、四 魯人爲_二長府_一、閔子騫曰、仍_レ舊貫_二如_レ之何_一、何必改作。
堯、一 審_二法度_一。

愬

顏、六 子張問_レ明、子曰、浸潤_二之譖_一、膚受_二之愬_一、不_レ行焉、可_レ謂_レ明也已矣、浸潤_二之譖_一、膚受_二之愬_一、不_レ行焉、可_レ謂_レ遠也已矣。

折獄

顏、三 子曰、片言可_レ以折_レ獄者、其由也與、子路無_レ。

爲、三 子曰、道之以_レ政、齊之以_レ刑、民免而無_レ恥。
路、三 子曰、野哉由也、君子於_二其所_レ不_レ知_一、蓋闕如也、名不_レ正、則言不_レ順、言不_レ順、則事不_レ成、事不_レ成、則禮樂不_レ興、禮樂不_レ興、則刑罰不_レ中、刑罰不_レ中、則民無_レ所_レ措_二手足_一。
爲、六 子張學_レ干_レ祿。子曰、多聞闕_レ疑、慎言_二其餘_一、則寡_レ尤、多見闕_レ殆、慎行_二其餘_一、則寡_レ悔、言寡_レ尤、行寡_レ悔、祿在_二其中_一矣。
泰、三 子曰、三年學不_レ至於_レ穀、不_レ易_レ得也。
憲、一 憲問_レ恥、子曰、邦有_レ道穀、邦無_レ道穀、恥也。

衛、毛 子曰、事君敬其事、而後其食。

未之有也。

季、三 孔子曰、祿之去公室、五世矣、政逮於大夫、

陽、五 公山弗擾以費畔、召、子欲往。

四世矣、故夫三桓之子孫微矣。

同、七 佛肸召、子欲往。

堯、一 堯曰、咨、爾舜、天之曆數在爾躬、允執其中、四海困窮、天祿永終。

先、二 季子然問、……子曰、今由與求也、可謂具

兵、陳、戰、亂、殺、弑

臣矣、曰、然則從之(季氏之所爲)者與、

顏、七 子曰、足食、足兵、民信之矣。

子曰、弑父與君、亦不從也。

路、元 子曰、善人教民七年、亦可以即戎矣。

顏、元 季康子問政於孔子曰、如殺無道、以就有

衛、一 衛靈公問陳於孔子、孔子對曰、俎豆之事、則嘗聞之矣、軍旅之事、未之學也、明日遂行。

道何如、孔子對曰、子爲政、焉用殺、子欲善而民善矣。

述、三 子之所慎、齊、戰、疾。

路、二 子曰、善人爲邦百年、亦可以勝殘去殺矣、誠哉、是言也。

路、三 子曰、以不教民戰、是謂棄之。

憲、三 陳成子弑簡公、孔子沐浴而朝。

學、二 有子曰、……不好犯上、而好作亂者、

當時國家の秩序漸く廢頽して、君父の道明ならず(顏、一)(路、三)。正義も罪せられ(微、一)、武斷的傾向盛となり(衛、一)、往々にして弑虐も行はる(公、一九、二二)(憲、二五)。

上流階級は僭上にして(罕、三)(季、一、二)、禮は行はれず(僂、一、二、六、一〇、一一、一七、二二)、反亂

を企つる者も出づる(陽、五、七)に至る。

民も亦上に服せず(爲、一九)、盜を爲し亂を爲さんとする者あり(顏、一八、一九)。されば浮華(僂、二二)(公、一六)(先、一)(衛、二五)、奢侈(罕、三)、不遜(季、六)、破廉恥(憲、一)たるは勿論にして、一に他

を排し自ら利せんとす(陽、二四)。其の結果は自ら趣味の上にも現はれて、色は間色、音楽は淫となる(陽、一八)。

要するに、當時は舊來の傳統的信念破壊の時にして(季、八)、厭世者も亦荐りに出るに至る(憲、三

九、四一、四二)(微、六)。

此かる世紀末に於ける現象に次で、其れに相當せる思想を生ずるに至りしは自然なり。即ち上にありては刑法を以て天下を治めんとする法家的傾向あり、下にありては功利的傾向次第に長ず。此くて上下の摩擦は益々激しくして、遂に忌まはしき事件を生ずるに至りしも、亦た止むを得ざるなり。今一々其の章を指示せざるも、前諸項に明らかなり。

第七篇 生物界

爲、七 子曰……至於犬馬、皆能有養。

脩、七 子貢欲去告朔之餼羊。

公、六 子曰、臧文仲居蔡。

同、三 子路、願車馬。

雍、四 乘肥馬。

同、六 子謂仲弓、犁牛之子、騂且角、雖欲勿用、

山川其舍諸。

同、五 策其馬。

泰、四 曾子言曰、鳥之將死、其鳴也哀。

罕、九 子曰、鳳鳥不降。

鄉、三 廐焚、子退朝曰、傷人乎、不問馬。

鄉、四 朋友之饋、雖車馬、非祭肉不拜。

同、七 色斯舉矣、翔而後集、曰、山梁雌雉、時哉時

哉、子路共之、三嗅而作。

衛、三 子曰、吾猶及史之闕文也、有馬者借人乘

之、今亡矣夫。

陽、四 割雞焉用牛刀。

同、九 詩……多識於鳥獸草木之名。

微、五 楚狂接輿、歌而過孔子曰、鳳兮鳳兮、何德

之衰。

同、六 鳥獸不可與同群。

堯、一 曰、予小子履、敢用玄牡。

右諸件は博物學的考察以外に別に説くべきことなし。唯だ孔子の動物愛は夫の「釣して網せず」の條に之れを知るべきのみ。

第八篇 神靈界

1 古代の諸祭禮

脩、六 季氏旅於泰山。

同、二 子曰、禘自既灌而往者、吾不欲觀之矣。

同、二 或問禘之說、子曰、不知也、知其說者之

於天下也、其如示諸斯乎、指其掌。

同、三 王孫賈問曰、與其媚於奧、寧媚於籩、何謂

也、子曰、不然、獲罪於天、無所禱也。

同、三 哀公問社於宰我、宰我对曰、夏后氏以松、殷

人以柏、周人以栗、曰、使民戰栗、子聞

之曰、成事不説、遂事不諫、既往不咎。

述、三 子疾病、子路請禱、子曰、有諸、子路對曰、

有之、誅曰、禱爾于上下神祇、子曰、丘之

禱久矣。

鄉、七 齊必有明衣、布、齊、必變食、居必遷坐。

2 古代支那人の宗教的信仰

古代支那人は天を崇拜し、其の崇拜の禮を「禘」と云ひ、地を崇拜し、其の崇拜の禮を「郊」と云ひ、又た固より祖先を崇拜し、其の崇拜の禮を宗廟の祭と云ひ、更に山川庶物を崇拜し、其れ等

にも各々特殊の禮ありて、現に論語にも禘の外に「旅」「社」「奧」「竈」等の名あるを見る。されど右諸禮は何れも明確なる概念を把握し難く、寧ろ甚だ多義曖昧なり。

禘郊は其の中最重なるものにして、他は殆んど之れに係屬して論じ得べきものなれば、今主として其れ等に就ての諸説を述べんとす。

「佾、一〇」に就き、義疏の註に曰ふ、「禘禘の禮は昭と穆とを序するが爲めなり。故に毀廟の主、及び群廟の主、皆な太祖に合食す。灌とは鬱鬯を酌んで太祖に灌いで以て神を降すなり。既に灌ぐの後、尊卑を別ち、昭と穆とを序づ。而るに魯は逆祀を爲し、僖公を躋せて昭穆を亂る。故に孔子は之を觀るを欲せず」と。

右禘に就き皇疏には曰ふ、「禘とは大祭の名なり。周禮に、四時の祭名は春は祠と曰ひ、夏は禘と曰ひ、秋は嘗と曰ひ、冬は烝と曰ふ。又た四時の外、五年の中別に二大祭を作す。一を禘と名け、一を禘と名く。而して先儒之を論すること同じからず、禘を爲すと謂ふは、禘するなり、昭穆を審諦するを謂ふ也。灌とは獻なり、鬱鬯の酒を酌み、尸に獻じ、地に灌ぎて以て神を求むるなり。禮に、禘は必ず毀廟の主を以て太祖の廟に陳在し、未毀廟の主も亦た太祖の廟に升せて、昭穆を序で、而る後共に堂上の未陳列主の前に合食す」と。

更に之れが註に曰ふ、「諸主を列して太祖の廟堂に在り。太祖の主は西壁に在りて東向す。太祖の子を昭と爲す、太祖の東に在りて南向す。太祖の孫を穆と爲す。太祖の子に對して北向す。次を以て東に陳べ、北に在る者は昭と曰ひ、南に在る者を穆と曰ふ。所謂父昭子穆なり。昭とは明なり。父を尊む故に明と曰ふ。穆とは敬なり。子は宜しく父を敬すべきなり。孔安國及び先儒の義に云ふ、禘と禘との禮は同じ。皆毀廟の主、及び未毀廟の主を取りて、並に昭穆を升せ列べて太祖の廟堂に在るなり」と。

邢昺云ふ、「鄭玄曰く、魯の禮は三年の喪畢りて太祖に禘す。爾自りの後五年にして再び殷祭す。遠主初始めて祧に入り、新死の主も又た當に先君と相接すべきを以ての故に禮は是れに因る。而して大祭を爲し、以て審に昭穆を序づ。故に之れを禘と謂ふ。禘とは諦なり。言は昭穆の次をして、審諦して亂れざらしむる也。禘とは合なり。文二年公羊傳に曰く、大禘とは何ぞ、合祭なり。其合祭とは奈何。毀廟の主太祖に陳べ、未毀廟の主も、皆な升せて太祖に合食すること是なり。三年に一禘し、五年に一禘す。禘の禘に異る所以の者は、毀廟の主を太祖に陳ぶることとは禘と同じ。未毀廟の主は、則ち各其廟に就て祭るなり。春秋文二年秋八月丁卯、大廟に文事あり。僖公を躋すと。公羊傳に曰く、躋とは何ぞ。升すなり、何ぞ僖公を升すと言ふや。譏るなり。

何をか譏るや。逆祀あればなり」と。

以上未だ明瞭ならざれども、禘なる祖先崇拜の大禮ありて、祖先の位次を定めて之れに敬意を致せしを知るべし。而るに魯に於て、君位上、後なる君僖公を、自然的親しさの順位に随つて、升せて上位とせしを、孔子が咎めしものと爲すを以て、以上の諸解となす。されど禘禴の概念と共に、孔子の其れに就ての非難の意義とも異説紛々たり。

朱註には、趙伯循の説を取りて曰ふ、「禘とは王者の大祭なり、王者は既に始祖の廟を立て、又た始祖の自りて出る所の帝を推して之を始祖の廟に祀りて、始祖を以て之れに配す。成王は周公の大勳勞あるを以て、魯に重祭を賜ふ、故に周公の廟に禘するを得。文王を以て出る所の帝と爲して、周公を之れに配するなり。然れども禮に非ず」と。然れども此の説の誤は既に確定的といふべし。

蓋し「禮記」の諸篇及び諸書共に禘を説くもの少からずと雖も、區々雜駁にして一定せず。徂徠は「禘の禮は傳を失す、其詳得て知るべからず」とす。劉寶楠も亦た「禘禮の説は千古の聚訟なり」とす。竹添氏は、更に之れを禮經に求め、參ふるに諸儒の論を以てして之れが説を爲すとして曰ふ、「夫れ禘の禮は虞夏に起る、豈に豫め後世昭穆を辨するの地を爲さんや。即ち周の禘禮は、武王の時に已に定まる。此時豈に文武以下の昭穆あらんや。故に昭穆を禘審するとの説は非なり。禘は本

と天子の大祭なり。故に禘の字は「示」に从ひて帝の聲なり。凡そ祭の大なる者、皆之を禘と謂ふ。是に於て諸侯の大祭も僭に因りて禘と名く。……故に爾雅釋天に曰く、禘は大祭なり。廟の制は天子は七、諸侯は五、大夫は三、……禘の時月は王制と祭統とは、皆な春は禘、夏は禘、秋は嘗、冬は烝と謂ふ。周禮の大宗伯、及び司尊彝、春秋公羊傳と爾雅とは、皆な春は祠、夏は禴、秋は嘗、冬は烝と謂ふ。而して禘の名あらず。……王制の注によれば、夏后の春祭を禘と曰ひ、殷人の夏祭を禘と曰ふ。此れ二代時祭の異名にして、周は則ち春を祠と曰ひ、夏を禘と曰うて時禘なし。……夫れ禘の祭は原と時祭の外に在らず。蓋し大禘禮を以て、之を嘗に行へば、則ち之を大嘗禘と謂ふ。更に井々は崔述を引いて曰く、「大廟群廟に皆な禘の祭あり。而して特に此れを制して以て始祖の自りて出る所の帝を祭るに非ざるや明らかなり。子曰、禘既に灌してより而往は、吾れ之を觀るを欲せず」と。

果して魯の禘が禮に非るの故を以てせば、亦た當に祭統、明堂位の言ふ所の如くなるべし。其の天子の禮樂を僭するは、皆な既灌以往に在りて然る後此言通す可し。若し趙(伯循)氏の説の如く、始祖の自りて出る所を祭るを以て僭と爲さば、則ち禘の初に當りて孔子即ち已に觀るを欲せざらん、何ぞ既灌以往を待たんや。……魯の禘は蓋し天子の祭器樂章を用うるを僭と爲すなり。其の實は禘

は乃ち當時の諸侯が群廟を祭るの通禮にして、必らずしも禘は天子獨有之祭と爲さざるなり。實に崔述は、其の「經傳禘祀通考」に於て、次の三點を力説せり。曰く「禘の禮たる先儒の説く者紛然として、愈變じて其の説愈巧なり。愈巧にして其の眞愈失す。大抵近世以來、人の通行して共に守る所の者三あり。其の一は以爲へらく、不_レ王_レ不_レ禘にして、魯の禘は僭禮と爲す。(此)説は喪服小記に本く。其の一は以爲へらく、禘は乃ち殷祭の名にして、三年に一禘し、五年に一禘すと。(此)説は春秋、説文に本く、何(晏)、鄭(玄)以來皆な之を用う。其の一は以爲へらく、専ら始祖の自りて出る所の帝を祭る。周は魯を禘して配するに稷を以てし、魯は文王を禘して配するに周公を以てす。此れ則ち王肅の聖證論に本き、趙匡之れを衍り、朱子之れを采りて集註に入る者なり。然れども之れを經に考へ、之れを傳記に參ふるに、説皆な合はず。而るに學者咸な之れに従ふ、良に怪しむ可きなり」と。此くて崔述は上述三點を否定せるなり。されど禘の概念に伴ふ困難は右に止まらず。何となれば、禘の外に更に郊ありて、兩者は一なる如く、又た別なる如ければなり。「中庸」に曰ふ、「宗廟の禮は昭穆を序る所以なり」又曰ふ、「郊社の禮は上帝に事ふる所以なり。宗廟の禮は其の先を祀る所以なり。郊社の禮、禘嘗の義を明らかにせば、國を治むるは其れ諸を掌に示す如きか」と。是れによれば、郊は天を祭り、禘は祖先を祭るものにして相區別せらるる如し。支那人

は一般に祭祀を重んじ、「凡治_レ人之道、莫_レ急_レ於禮。禮有五經、(五經、謂吉、凶、賓、軍、嘉)莫_レ重_レ於祭。」(祭統)と曰へり。

されど支那古代に於ける祭祀は、其の對象、種類、方法、時期及び動機等其の何れより見るも、或は相矛盾し或は曖昧なり。其中最も著名なる禘及び郊に就ても、既に明確なる概念を握みがたきこと上述の如し。今試に禮記によりて更に少しく禘の説に擬似の附き纏ふもの多々あるを見れば、其の自ら然るべき所以の理由をも知らるるを思ふなり。或は人間、動植物或は更に人造物たる奥、竈等言はば、祭祀の對象は日月星辰、天地間の一切なり。甚しきは人と物とのみならず、其の様態にまで及ぶ。即ち祭法に、

燔_レ柴於泰壇、祭_レ天也、瘞_レ埋於泰折、祭_レ地也、壇折封土、爲_レ祭處也用_レ騂犢、埋_レ少牢於泰昭、祭_レ時也、……祭_レ寒暑也、……祭_レ日也、……祭_レ月也、……祭_レ星也、……祭_レ水旱也、……祭_レ四方也、……山林、川谷、丘陵、能出_レ雲爲_レ風雨、見_レ怪物、皆曰_レ神、有_レ天下_レ者祭_レ百神。(祭法)

されど此く祭らるる諸對象も、其の間に輕重の別あり。而して其の最も重要なものは即ち禘と郊なるが、其の何者なるかに至つては、諸篇の記載著しく相異なるものあり。第一に注意せらるるは兩者の別か、又は同かなり。

- (イ) 禘は祖先を祭る。「郊」は天地の根源たる天を祭る。而して場合によりては、天は非人格的なり。此くて禘郊は別なり。(王制、禮器、郊特牲、中庸等)
- (ロ) されど天を人格的と考ふるに隨ひ、歴史的と否との差は没却されて、禘郊は類同せらる(祭法及び經解)。更に鄭玄の注に至つては、兩者の區別全然不明なり。

蓋し祭の種類は祭らるる對象の認識の進展に従つて變化す。上古の人民も、人と物との別を爲さざるものなし。而して人に就きては祖宗、物に就きては大きく言へば天と地と別たるも、更に天の中に在る日月星辰等は其れ等として、又た地の中に在る山川林澤等も其れ等として、崇拜せらるるのみならず、尙ほ其の他の庶物に及ぶ。されど人も物も、徹底的に其れ等の根源を尋ぬるに及んでは、明確に相分別し能はざるものあるに至るは勿論なり。即ち對象の廣さに就ては、之れを得るに隨つて、靈化すれば其れ迄なれども、對象の深さを考ふるに及んでは、種々の異見を生じ、遂に漠然に了るを常とす。現に人の本は祖先なりとして、一と通りの解釋を得るにせよ、更に考ふれば祖先の本たるものもあるべき筈にして、此く本を推し究むれば人の本は物の本と一致するに到るべきことなりとするが如し。宗廟の祭なる禘と、天の祭たる郊と、地の祭たる社とは古く行はれたるべきは容易に考へ得べき所なり。

而して此の中最も尊嚴視されたるは天にして、此くて郊の祭は決して諸侯の爲し得る所に非ずしで、必らず天子にして能くすべき所とされたり。喪服小記及び大傳に於ては、禘も亦た王者に限りての祭とされたれども、他の諸篇に於ては然らず。崔述は前者の非を辨じたれども、今其の是非は暫らく措きて、祖先を其の本に徹底するの度に従つて、禘の意義は次第に變じ、遂に其の天と一致するに至りて、禘は郊と異ならざるに至る。隨つて禮記に於て、禘の意義の變化して一定せざるは當然なり。夏殷以來、祖先四時の祭は、多少様式を異にし、隨つて名を異にしたるが如きも(王制等)、其の詳得て考ふべからず。禮記は當時諸儒の思索に成れるものなれば、客觀的に古禮を記述するに當りても、自ら諸儒の主觀の混入を免れず。是れ祭の意義の深さより來れる其の種類の區別なるが、更に祭の對象の廣さより來れる古來の區別、即ち思索の加味せられざる、言はば土俗的信仰としては社の外に五穀を祭る「禩」あり。「奥」あり、「竈」あり、「門」あり、「行」ある等、様々雜多數ふるに暇あらざること、王制、郊特牲、明堂位、祭法、祭義等の諸篇に明らかなり。今論語にある限り、此所に其れ等に關する竹添井々の解釋を擧ぐれば次の如し。

社とは社主なり。禮運の注に、社とは土地之主なりとあり。白虎通の社稷篇には、社とは土地之神なりとあり。其の主として用うる所のものは何ぞといふに、其は即ち木を用ひたるを見る。後世或は石を用ひた

るものも之あるらしきも、是れ春秋時代以前に之なきなり。尹彦明は始めて社樹の説を造り、而して朱子之を取。其の意に謂へらく、古は樹を以て社主となし、神をして棲息凭依せしむること、後世の神樹の如し。而して宋の櫟社、豊の枌榆社は皆な樹を以て名くと。されど「枌榆」は單に郷名にして樹に非ず、櫟社は莊子の説ける怪説にすぎず。恐らく既に主ある社あり、其所に一大櫟樹あるによりて、流俗之れを神木と爲せしに外ならず。論語に論ずる所の社は、禮記の祭法に、王群姓のために社を立つるを大社と曰ひ、王が自らの爲めに社を立つるを王社と曰ひ、諸侯が百姓の爲めに社を立つるを國社と曰ひ、諸侯自らの爲めに社を立つるを侯社と曰ふものはなり。尙書逸篇に、「大社はれ松、東社はれ柏、南社はれ梓、西社はれ栗、北社はれ槐」の文あり。周禮大司徒職に云ふ、「之れが田主を樹うるに、各其野の宜しき所の木を以てし、以て其野と田とに名く」と。されば古昔に木を植て田主と爲し、之を社と謂ふの事なきに非れど、是れ木を刻んで主と爲すの社とは、自ら別なるに、後儒混じて一となし、大社主なしの説起るも、誤まれり。

旅 天子は天下の名山大川を祭り、諸侯は境内の名山大川を祭る。魯國に淮と海と岱とあり、之れを春秋には三望といふ。是れ常祭にして、季氏の如きも之れを僭すべからざるものとす。

旅も祭の名なるが、其の原義は「陳」にして、其の祈禳の事を陳ねて、禍を消し福を致さんことを欲するものにして、常祭に非ず。凶災ある場合に行ふものなり。而かも亦た季氏の僭すべきに非るなり。

奥竈 奥とは室の西南隅をいふ。竈とは五祀の一にして、夏の祀る所なり。九そ五祀を祭るには、皆先づ主を設けて其所に祭り。然る後戸を迎へて奥に祭る。略ぼ宗廟を祭るの儀の如くす。竈を祭る如きは、則主を

竈徑に設け、祭り畢りて更に饌を奥に設けて以て戸を迎ふるなり。故に時俗の語、因りて奥に常尊あれども、祭の主に非ず。竈は卑賤と雖も時に當つて事を用うといふ。

集注に言ふ所の五祀を以て言へば、則此の奥とは廟門外西室の奥を謂ふ也。九そ五祀を祭るは、必らず先づ席を奥に設け、戸中靈を祀るなり。廟室中に在つては、則席を設くること、廟堂の奥に在り、竈門行を祀るなり。廟門外に在りては、則席を設けて廟門の奥にあり。逸中靈の禮説は是の如し。

更に禘郊を行ふ方法に就て之れを考ふるに、支那人は飽くまで形式を愛し、階級を重んずる國民なれば、祖先に就ても、仔細に遠近親疏を分ちて等級を立て、嚴に其の秩序を失はざらんと務めたるのみならず、其の間又た一々其れに隨つての作法を設けたり(祭法、祭義)。今一々之を明示せずと雖も、此所に注意すべきは流石に孝中心主義の國柄なれば、祖宗を祭るに際し、最も之れに敬意を拂ひ、種々の作法を設けて子孫をして何處迄も敬に徹底せしめんとせしこと其の禮は是れなり。而して「齋」なり。致齋三日、散齋七日あれば、眼前に於て祖先を壇の靈位に見聞するを得るとす。是れ連日祖先てふ觀念に思想を集中し、遂に強烈なる其の映像を思ひ浮ぶるに至るものにして催眠術的方法なり。此く爲さざるべからずとする所、正に支那人の孝敬の念の厚きを知るべし。されど餘りにも作爲的に陥る點に於て、彼等の偽善的傾向を見るなり。

致齋於内、散齋於外、齋之日、思其居處、思其笑語、思其志意、思其所樂、思其所嗜、齋三日、乃

見其所爲齊者致齊思其五者也、散齊七、日不御、不樂、不吊耳。（祭義）

祭之日、入室儼然必有見乎其位、周還出戶、謂薦設時也、肅然必有聞乎其容聲、出戶而聽、儼然必有聞乎其歎息之聲。（祭義）

又た天神人鬼を敬する動機を尋ぬるに、天子の行ふ郊禘は民の爲めに幸福を祈る。感謝報恩なり。

季夏之月、……命四監、主山林川澤之官、大合百縣之秩芻、以養犧牲、令民無不咸出其力、百縣給國養、犧牲之芻、多少有常、

以共皇天上帝、名山大川、四方神、以祠宗廟社稷之靈、以爲民祈福。（月令）

萬物本乎天、人本於祖、此所以配上帝也、郊之祭也、大報本反始也。（郊特牲）

晉に天や天地に對してのみならず、歴史的の人々に對しても、其の功勞に報ゆることあり（祭法）。要するに、禮記の成りし漢代に於ては、禘郊等の古き祭式も、既に異論區々なるまでに廢絶したるを見る。是れ、もと王者及び諸侯の間の禮なりしが、春秋戰國を経て、秦漢の時代となり、秩序全く一變せし時に於ては固より當然なり。

蓋し古代に於て、帝王が自ら祖先及び皇天后土等の神々に對し、深厚なる敬虔の情を有し、鄭重なる儀禮を定め、之れを以て臣民統治の具に供したりしも、星移り物變はる間に、人々は既に眞面目に之れに従はんとせざるに至りしも、亦た自然の勢なりといふべし。現に管子の如きさへ、教化の手段として祭祀を重んじたること、經言中の牧民第一に次の如く言へり。

順民之經、在下明鬼神、祇山川、敬宗廟、恭祖舊、……不明鬼神、則陋民不悟、不祇山川、則威令不聞、不敬宗廟、則民乃上校、不恭祖舊、則孝悌不備。（牧民第一、國頌）

されど之れに次げる各篇章に於て、祭祀を重く論じたること無きを見れば如何に管子の著者或は著者等が時勢上其の無功を信するに至りたるかを知るなり。更に墨子に至つては、務めて尊天敬鬼（天志及び明鬼篇）を説き結局仁義は天意なること、而して過去の事實に於て、鬼神の制裁は嚴乎たりしことを反覆したり。されど古代に於ては嚴乎たりし制裁も、今は然らず、人々は場合によりては神も佛も無き世なりと感ずる世となりては、墨子の引ける鬼神の存在説の如き甚だ心もとなき空言となり了らざるを得ず。此れ等の言説は到底人心を既倒に回す能はざりしなり。而して周の禘も亦た此か

る大勢中にありしは極めて明らかなり。孔子が魯の三家の僭を慨し、又た魯の禘につきても非禮あるを慨せしは今更ら言を待たず。されど其れ等は今より言へば、一瑣事に過ぎず。唯だ禘郊等によりて、古代支那人の宗教思想を窺ふは頗る重大なるが、其は人々の之を合理的に解釋するに隨ひ、區々の説明生じて曖昧多義を致したるを見る。孔子は在來の信仰を動かさんとせざりしと同時に、信仰を合理化するに至りしこと、其の天に對する思想之れを證して餘ありといふべきのみ。

第九篇 孔子教の大旨

1 支那太古の社會と歴史的社會

古代の支那人種は如何なるものなりしか。其れには種別ありしか。もし有りとせば何々なりしか。其は西より來りしか、又た其の地固有なりしか等々、今日尙ほ幾多の疑問の存するを免れず。随つて其の社會的存在が如何なるものなりしかも亦多く不明なり。或人は支那人種は凡て極端なる個人主義利己主義にして他人と相親睦せざるを以て、眞の意味にては社會なるもの彼等の間になかりしといふ。是れ現代の支那人より歸納せる古代支那の社會に外ならざるべし。實に古代穴居の人民など、各自が深く其の狭小なる巖窟内に蟄居して、殆んど他と没交渉なる生活を爲したるべしとも考へ得ざるに非るも、さればとて亦た全く隣接せる地理的交渉なき能はざるを想ふなり。況んや更に同一父母を有する血族關係に於ておや。勿論最古代に至りては、所謂母系中心にして、子供は母を知りて父を知らざりし時代も事實之ありしに相違なし。人類が總じて母と共に父を知るに至りし迄には長年月の發達を待ちしこと社會學の告知する所にして、此は獨り支那のみに限らざるなり。今たと

へ母のみを知るとしても、同胞は同胞として一種血縁の親しみを有すべきは、人情の自然ならざるべからず。果然古代支那に於ても、同姓は異姓と區別したる或種の關係を有したること、諸記録の一致する所なり。されば如何に古く溯るとも血縁と地縁とは、程度の差こそあれ、之ありしに相違なく、其所には個人主義利己主義の全然の徹底を容さざるものあるを想はざるを得ず。

試に暫らく人類の原始情態を考へんに、所謂「自然的情態」に就ては、西洋近世の諸學者の間大なる異見あり。ルツソーの如きは、最古最初の人類は相互に固く愛を以て結びつき、其れこそ四海波靜かにして嘻々として太平を謳歌せりといふ。されど此の「黄金世界」の信仰に反して、ホップスは所謂「一切對一切之争闘」を提唱し人々各自内面的に相親愛するもの曾て之なしといひ、縦より横より、左より右より、有らん限りの事實を擧げて人々の徹底的なる利己振を證明せしこと哲學史上に著名なり。彼によりて高く掲げ出されたる此の大問題は、爾來カムバーランドを始め、カッドウォース、モアア等の大反對を受けたるも、爾後ロック等の大家さへ寧ろホップスに賛成したるを見れば、此く諸大家の必死の討論を経たる後も、結局和氣藹々の「自然的情態」てふ概念も確然たる勝利を得ず、遂に最近の進化論が優勝劣敗適者生存を叫ぶ迄持ち越されたる状となれり。

此かる觀點より古代社會を想像すれば、獨り支那の古代社會のみならず、一般に原始的社會が殆

んど徹底的に利己主義個人主義的たりしことも疑を要せざるに似たり。

或人は如何に徹底的に利己主義なりとは云へ、夫婦親子の愛の無き時代は想像し得べからずといふ。實に夫婦の交なくば、子孫の繼續なきは明白なる事實なるも、夫婦の交は本能の關係に過ぎず、之れを愛と言はば一種の愛に相違なきも、此の愛は未だ道德の贊美を受くべき資格あるに非ず。蜜蜂の女王、蜘蛛の雌は、交尾の用を遂ぐれば、直に其の夫たる雄を殺すと言はる。又た動物の中には、其の子を産みて自ら之れを食ふものも少からず。此の如きものにありては夫婦も親子も、凡て是れ本能の支配する所にして其の離合生殺は決して親愛の沙汰には非るなり。随つて男女の關係ありて子孫の相續することは其れ等は物間の親愛關係ありし證據とはなすべからざるなり。利己主義的なる社會構成觀も決して輕視すべからず。是れ亦た之れを支那の古代に適用すべからざるか。苟も現實を注視せし古代の諸學者は、此かる考察を忘れざりしなり。

支那古代社會論に於ても亦前述の如き兩極端あり。管子は人類の原始情態は相尅なりとす、曰く、
 古者、未有君臣上下之別、未有夫婦妃匹之合、獸處群居、以力相征、於是智者詐愚、彊者凌弱、老幼孤獨、不得其所、故智者假衆力、以禁彊虐、而暴人止、爲民興利除害、正民之德、而民師之（君臣下）されど管子は決して一人の筆によりて書き成されたるものに非れば、

節怒莫若樂、節樂莫若禮、守禮莫若敬、外敬而內靜者、必反其性（心術下）

とも之あり。是れ恐らくは老子流に感化されたる復性主義的門流の言なるべし。政刑を重んぜし管仲より考へて、古代に黄金世界ありしとも思はれざるべきなり。儒教徒たる荀子さへ言ふ、

人生而有欲、欲而不得、則不能無求、求而無度量分界、則不能不爭、爭則亂、亂則窮、先王惡其亂也、故制禮義以分之、以養人之欲、給人之求（禮論篇）

今人之性、生而有好利焉、順是、故爭奪生、而辭讓亡焉（性惡篇）

法にせよ、禮にせよ、兎に角客觀的制限の必要を説く者の出發點は、人類の相尅相争にあるは當然なり。等しく堯舜禹湯の聖王たるを言ふに憚らざる墨子も、

古者民始生、未有刑政之時、蓋其語人人異義、是以一人則一義、二人則二義、十人則十義、其人滋衆、其所謂義者亦滋衆、是以人是其義、而非人之義、故交相非也、是以內者父子兄弟、作怨惡離散、不能相和合……天下之亂、若禽獸然、夫明於天下之所以亂者、生於無政政當爲正長、是故、選天下之賢、可者立以爲天子。（尙同上篇）

是れ原始情態が四海波靜かなりとは爲さざるも、聖王立ちて後は完全なる平和境の來りしことを説く。されば支那に於ける「自然的情態」の思想は何日誰れによつて説き始められたるや、勿論孔子も「信而好古」と云へば、或る意味にて「古」に理想的情態ありしとしたりとも言ひ得べしと雖

も、是れ後世の復古復性論者の如き意味にてはあらざりしなり。

孔子の聖人視せし堯舜の時代には、人々の間多少の相尅も之あり、善治は其を克伏してもたらされたるものなり。又た前後兩主權者間の傳授の如きも必らずしも禪讓なりしとも孔子によりて説かれたるを聞かず。恐らくは禪讓論は更に後代の提唱ならん。絶對平和なる自然的情態の提唱は老子を以て其の始となすべし。(老子の存在も亦た異論頗る多くして歸一する所なし。吾人は寧ろ之れを累代の在野不平の思想家團と見るを可とするものなるが、暫らく此所に之れを老子の名によりて説かんに) 堯舜聖治の傳統は、既に孔子以前にありても孔子之れを信じたるが、老子こそ其の本質に於て今を非とし古を是としたること疑なし。道の道とすべきは道に非ず。眞の道は「大道」にあり。而るに大道廢れて仁義(の世)あり、法令滋くして盜賊多く有り等の言は、是れ現代の秩序を非認して、其れ以前の古代に有りしと想像せらるる共產社會を謳歌せしものなり。勿論儒家者流にも亦た全く此かる思想なしとは言ふべからず。思ふに是れ其の當世に用ゐられず、孤立寂寥の生活を餘儀なくせらるるに至りて、境遇の類似はやがて内面的にも老子教と融合せしものと思はるるなり。

禮記の禮運に曰ふ、「大道の行はるるや、天下を公(のもの)と爲し、賢と能とを選び、信を講じ睦を脩む。故に人獨り其親を親とせず、獨り其子を子とせず(即ち共同の親にして共同の子)、老をし

て終る所あらしめ、壯をして用ゆる所あらしめ、幼をして長する所あらしめ、矜寡孤獨廢疾者をして、皆な養ふ所あらしむ。男に分(職)あり、女に歸(家)あり。貨は其の地に棄てらるるを惡むも、必らずしも己れに藏せず。力は其の身に出でざるを惡むも(勞して憚らず施して吝ます)必らずしも己れが爲めにせず。是の故に謀は閉て興らず、盜竊亂賊は作らず。故に外戸は閉さず。是を大同と謂ふ。今大道既に隱る。天下を(一己の)家と爲し、各其親を親とし、各其子を子とし、貨力を己れ(がもの)となし、大人は世及(世襲)以て禮と爲し、城郭溝池以て固めとなし、禮義以て紀と爲し、以て君臣を正し、以て父子を篤うし、以て兄弟を睦くし、以て夫婦を和し、以て制度を設け、以て田里を立て、以て勇知を賢とし、功を以て己れ(がもの)と爲す。故に謀是を用て作り、兵此に由りて起り、禹湯文武成王周公此に由りて其れ選まる。此六君子は未だ禮に謹しまざる者あらざるなり。以て其義を著はし、以て其信を考へ、有過を著はし、仁に刑(則)り讓を講じて、民に常あるを示す。如し此に由らざる者あれば、執(勢位)に在る者は去り、衆以て殃と爲す。是れを少康と謂ふ」と。此は是れ正に老子の意を敷衍せるものに外ならず。而して其の大意に以爲へらく、原始社會は共產制なり。男は凡ての女の夫、女は凡ての男の妻の雜婚にして、人々は母あるを知りて父あるを知らず。凡ては公のもの、共同のものにして、勞力も財貨も一私のものといふはなし。名譽も亦た然り、

施して誇らず、受けて恩とせず。されば人々營々齷齪として經營するの念もなく、爭奪盜賊する必要もなし。戸は閉さず、兵器も用なし。凡て是れ太平の象、之れを大同の世といふ。されど此かる社會情態期して得べからざるに至りて、禹湯文武等の禮を以て支配せざるべからざる少康の世現出せりといふ。大同の「大道」廢れて、少康の「仁義」(の世)次で來れるなり。禮運は唯だ流石に儒の立場に立ちたるを以て、禮の重要性を説く點老子と異なるを見るのみ。果して支那の古代に於て大同の時期ありたるべきや。否な、其は依然として畢竟學說上よりの空想にして、事實の言明には非るなり。唯だ共產制、雜婚等の事は即ち之ありしならんも、其の内部は必らずしも大和、大同とは言ふべからず。凡ては未熟未完の社會情態たる迄にして、實は其の間幾多の小不和小競争小喧嘩を見たるべきは想像に難からずといふべし。

三皇五帝の説話が神話に過ぎざるは今更ら言を待たざるのみならず、論語に於て孔子によりて最上級の賛辭を呈せられたる堯舜禹が、亦た頗る老子流に近きは注目し値する所たらずんばあらざるなり。何が故に此れ等聖王が然かく尊崇せられたるか。孔子は舜禹の天下を有せし態度を、「巍々乎」として之を有せざるが如し(泰、一八)といふ。是れ老子の根本思想たる、天長地久なる所以は有ちて有たざるが爲なりといふに近からずや。堯の大なるや、巍々乎として天の如く、民能く名くるなけ

れども、成功あり又た光輝ありとす(泰、一九)。是れ又た老子の無名の本體は、無意にしてよく萬物を成し、萬徳を來すと似たらすや。又た舜は無爲にして天下を治め、己れを恭うして正しく南面するのみ(衛、四)といふ。是れ其の禹、稷、契、皋陶、伯益等の臣五人あつて、天下の治まる(泰、二〇)に由ると雖も、賢臣を選任する苦心なき點に於て、又た頗る老子に近づける觀なきか。禹の贊美に至りては、其の衣食住の質素儉約にして農事を務めしが、祭服は之れを美はしくして孝を鬼神に盡せしといふ(泰、二一)。此れは又た「間然するなし」としては聊か貧弱にして、其の「樸素」を稱ふるとしては等しく老子に近しと言はれざるに非ず。余は此れ等の言が老子の感化を受けたる門流の筆に成れるに非るかを疑はざるを得ず。實に孔子としては、徹骨徹髓周公を夢みたるもの、而して周公は武王を助けて殷を亡ぼし、殷民の未だ平がざるに當りては、苦心百端、之れを宣撫し周の秩序を立て、周の禮制を定めたるものなり。孔子は自ら政治的手腕は有せざりしも、天下を平治するの必要を認め、遂に禮制嚴然たる社會を理想とせしは明らかなり。されど其の四海波靜かなりし大同の社會が太初の世にありて其れが理想境なりしとの信念を有せしことに就ては何等の明證なし。されば其の説きし道が堯舜の傳統に出でたることを信じたるにせよ、其は單に古の明王といふ迄にして明王の世も亦た決して大同の社會にあらず、隨つて禪讓の如き平和的事象のありしとも斷定し得ず。

堯舜の存在を否定せしものとして夙に白鳥庫吉博士あり。之れを反駁せしものとして林泰輔博士あり。互に理由なきに非すと雖も、書經等に於ける最近の考證は、其の頗る非事實なるを證せるものにして、存在の確實性は大に怪しまるるに至りしといふを以て正しとすべし。實に孟子等によりて堯舜は禪讓し湯武は放伐すと言はる。而して放伐は或は正しからざる如くなるも、禪讓は善美なる理想的行爲なりとも考へられざるに非ず。されど如何に古代に於ても凡そ集團生活の行はるる所、其の統率者あらざることなく、又た統率者にして或る程度の権力行使のあらざることなし。換言、所謂政治は即ち多かれ少かれ力を以て他を壓伏することならざるべからず。されば所謂聖王は兎にも角にも一種の壓伏者壓制者なり。而して其の集團の大となるに従ひ、其の権力の行使も亦た強大とならざるを得ず。随つて其の壓制の程度も亦た深刻なるは理の當然なり。今堯舜は當時の天下の主長たるものなれば、其の権力の傳受が然かく和氣霽々、談笑の間に行はれたるべしとは、神ならぬ身の到底なし得べからざる所といふべきなり。即ち堯舜を人ならぬ神として後始めて考へ得べき所とす。是れ寧ろ壓伏壓制に苦しみ拔きたる古代の支那人が、現實惡に苦しみたる極、夢想せし理想境の君主の概念に非るか。儒教徒は、要するに政權保持者の宣傳機關たるに反し、道教徒は其の反對たる在野黨たる思想家なれば、或は疾くより世にありし下隨務光等其の他の厭世家が、早く言ひ

觸らし、末世となるに従ひ一般民衆も喜んで之れを受け傳へし傳説に非るか。其れとして堯舜は單に儒教の理想なるのみならず、又た道家も蔑視せざりし所たり。されば堯舜は現實の反對を現はす夢表の人に過ぎずとも見得べく、少くとも孔子の禪讓を説かざりしは事實なり。換言、孔子の理想社會は然かく無事平安なるものに非りしならん。

孟子には更に放伐論あり。もし當時の君主にして不徳暴虐なること、紂の如き者あらば、天は之れに君主たるの資格を認めず、更に他の徳者をして之れに代らしむ。即ち新君主たるの天命之れに降るなり。此くて武王が紂を誅せしは、一夫たる紂を誅せしまでにして、天子を弑せるに非ずと。天子たり得るは有徳を條件とせることを言へるものなり。是れ荀子も亦た等しく説く所なり。孔子は果して然りしや否。論語には未だ此かる天命説あらず、従つて放伐を是認せし言句會て之あらざるなり。唯だ書經の中には孟荀と同意義の箇所を發見するも、吾人は論語を基礎として之れを否定せんとするものなり(孔子の政治論の章参照)。されば孔子に既に放伐論なく、又た其の是認なしとすれば、書經と孔子との關係は果して如何。恐らく論語の詩書執禮の「書」なるものが、今傳はれる如き書經にてはなく、言はば斷簡的なりしものならんと信ぜらるるなり。而して古文今文に關はらず、書經の考證上よりの考察に従へば、其の成立は孟荀以後といふ者あれば、或は此かる放伐論は孔子の時代になく

して主權の爭奪の益々大問題となれる戰國時代に生ぜしものに非るか。何れにせよ優勝劣敗弱肉強食は當時の現實の事相なりしに相違なし。此の中に立つて、人々は平和秩序を思ふこと大旱の雲霓に於けるも曾ならず、且つ人間は恆にも過去を美化する傾向あるを以て、時代の末世となるに従ひ、古代支那人が此所に堯舜を夢想して禪讓論を唱ふるに至り、更に主權の動搖其の極に至るに従ひ、儒家の道德的見地より放伐論を提議したるものと思はる。されば禪讓の傳説と放伐論の現出との間には相當年代上の距離あり。孔子は共に此れ等に與らずといふべし。即ち孔子の腦裡に畫きし古代社會なるものは、大同大和には非ずして、唯だよく平治を企畫して達成せる明君の治世といふにあり。

此くて堯舜の治世といふは恐らく傳説時代なり。放伐の行はれし湯武は歴史の現實なり。字通りに、「四海波靜」かなる時期は何れの日にも之あらず。事は凡て少康と大亂との兩極の間に見るを得。而して孔子の生活したる春秋時代は、一たび武王周公によりて固く建てられたる秩序が次第に傾きて、將に大亂に至らんとする時なりしことを待たず。此の間に立ちて孔子が當世に對する態度如何なりしと云へば、其は進歩的ならずして保守的たりしも亦た明白疑を容れず。換言、孔子は急激亂暴なる革命の必要を認めず、穩健なる漸進的改良によつて天下を平治し得べしと考へたり。されど其は果して實行的政策なりしや否。孔子が高く「沾らん哉沾らん哉」の旗幟を掲げて四方に

周游せりと雖も、學者賢者として多くの侯伯によりて尊崇されしに關はらず、遂に用ゐらるることなく、遂に不遇に終りし所以は、結局其の實際政治家に非りし實證に非ずや。高き見地より之れを見れば、孔子を用ゐざりしは、用ゐざりし者の不徳によると言はば言へ、現實の世界に立つて之れを料理鹽梅するに堪へたる者とし云へば、理想を有すると同時に、又た實に之れを行ふべき方策を講ずるの才略なかるべからざるに、孔子にありては之れを缺くと言はざるべからず。吾人は此くいふを以て、概に孔子を小とする者に非ず。寧ろ顔回と共に、夫子之道至大、天下莫能容……不_レ容然後見_ニ君子_一とする者なり。換言、孔子は政治家に非ずして理想主義者なり。一國一地方の爲めに生べき者に非ずして、廣く天下の爲めに生べき者なり。一世の爲に生くる者に非ずして、萬世の爲めに生くる者なり。是れ其の教が普遍性を有して、其の人が聖者として萬邦に尊信せらるる所以ならずんばあらざるなり。孔子が此く認識せらるるに至りしには、多大なる年月を要せしと雖も、而かも遂に之れを認識せしは、支那人の一偉大性を物語るものといふを得べし。

2 孔子教の精華要約

論語一卷に説く所、多くは是れ教にして理に非ず。即ち其は孔子の直覺によりて告知せられたる

人生行路の正しき指導標なり。而して其が大體に於て適切妥當なるものなりしことは、既に各部門に涉りて解説批評せし所なり。唯だ如何にせむ、孔子の生れたる時代は、國としては周の獨裁的君主制の確立せし時、随つて家としては父權萬能の家長制下にあり、而して保守主義的なる孔子は、敢て之れに變革を加へんとせざりき。されば君に仕ふる臣、親に仕ふる子たる者は、何等の權利も認められず、殆んど此かる秩序の奴隸たるの觀あり。されば君を離れ、又た父を離れての人なる概念あることなく、人間社會唯だ上下の關係あつて平等の其れを缺く。故に國と家との以外の社會なるものも殆んど之あることなし。孔子の教も此かる制限を受けて、一部今日に適用すべからざるものなきに非ざるは其の大缺陷なり。

されど流石に既に普遍を直觀認識したる聖人の教なれば、能く其の精神を看取して多少の斟酌を爲し得る者に取りては、何れか好教訓たるものに非るべきや。唯だ其の看取と斟酌とは亦た倫理的的研究を必要とするは勿論なり。今多少重複に涉る嫌あるも、更に約論として孔子の教の本質的優秀性に就て再説する所あらんとす。

大凡そ教の妥當性は、「之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ中外ニ施シテ悖ラザル」理の普遍性に由らすんばあらざるなり。而して孔子の教は之れを明示せずと雖も、確かに然る原理を含蓄せり。即ち、其は

- (1) 大我の自律主義
- (2) 活動主義
- (3) 博愛主義

を示唆せり。吾人は孔子が此かる思想を提唱せりと言ふに非れども、孔子の腦裡には此かる眞理の直覺を有せりと爲すものなり。換言、孔子の傳へたる教を分析研究せる結果は、其の中に此かる普遍理の潜在するを發明し得るの意に外ならず。

哲學的に大觀すれば、凡そ研究の對象は自我と非我にして、非我は之れを世界宇宙と稱するを得。即ち自我と宇宙は思想の二大極なり。如何なる點より出發するも、思想の遂に此の兩極に至らざるものは未だ之あらず。されど此の二つこそ、行けども行けども行き盡せぬ遠さと、切れども切れども切り盡せぬ堅さとを有するものにして、言はば人類に課せられたる永遠の謎なり。人類は其の薄弱なる能力を以て、遅々として之れが解明の事に従ひつゝあり。而して孔子の如きは其の中最も優秀卓拔なる頭腦の持主たるに疑なく、果して其の聰明に於て其の一端たる自我論に觸れたること、自我の項(二八頁)に於て説けるが如し。眞に價值あるものと言へば、自我にして、道德的とは即ち自我の命令其の物に従ふに外ならず、即ち、「由己」、「爲己」、「自慊」の自律ならざるべからず、人の行

爲も此の境に至らざれば、其は畢竟浮薄にして實質なしといふなり。勿論自我の詳論に至りては、孔子の爲さんとせし所にもあらず、又た爲し盡し得べき所に非るも、孔子の發題を本として、孟子荀子を始め、禮記に見ゆる儒家者流が、盛んに其の研究に従ひ、秦漢時代以前既に相當の成績ありたるのみならず、更に宋明に至りて其の發達を遂げ、王陽明は明らかに「真己」の語を點出せり。されど我が徳川時代に至りて、益々自我本然の姿を究明するを得たり。試に其の一端を言はんか、大鹽中齋は、社會現象は皆な我れと關することを著實に認識して曰ふ、

夫人之嘉言善行、即我心中之善、而人之醜言惡行、亦吾心中之惡也、是故聖人不能外視之也、……或曰、如子之說、則惡人之罹刑、亦刑聖人之心乎、曰然矣、是即去吾心之惡之道也、然而不能不悲也、豈亦可歡喜乎、曰、善人之遇賞、亦賞聖人之心者乎、曰然矣、是即存吾心之善之道也、然而不能不喜也、豈亦可媚嫉乎、只媚嫉人之善、歡喜人之惡者、以吾心爲我物、乃一小人、而非聖人太虛之心也。(洗心洞 劄記)

並河天民は、當時の某權臣に與へたる書に於て次の如く言へり、曰く、

今兄は是れ國の巨寶なり。而して君民士庶の皆其力に資る所なれば、則君民士庶は則ち兄の己れの在る所なり。君の非の格さざるは、則兄の己れの未だ脩らざるなり。民生の阜らざるは、則兄の己れの未だ脩らざるなり。士風の淑らざるは則兄の己の未だ脩らざるなり。君心正しからざる莫く、民の生厚からざるなく、士習美ならざる莫く、而る後に兄の己れ始めて脩るを得。(天民 遺藁)

是れ佐藤一齋が「君子自慊、小人則自欺、君子自彊、小人則自棄、上達下達、落在「自字」と同義にして、更に精密なりと言ふべからざるか。天民にせよ、中齋にせよ、其の生存の當時に於て、比較的著明ならざりし學者も尙ほ此に至る。されど其の根源の孔子にあるは疑ふべからざるなり。されど此の至尊至貴の自我たる、決して普通人が自ら認めて自我とする所の心理的の自我には非ずして、必らず倫理的の自我たらざるべからず。而して後者は、寧ろ前者を否定して後始めて修得せらるべきものなれば、無我的自我、即大我にして、其の内容たる亦た平凡卑俗なるものに非るなり。大我は必らず活動主義を其の本質とす。

吾人は既に仁の項(頁七八)に於て孔子の活動主義を指摘せり。今此所に之れを繰返す必要を見ずと雖も、西洋に於て其の「活動」の原語たる Eudaimonia は、普通之を Happiness (幸福)と譯さるるが、シヂウイックは之れを不可として活動的要素のウエルビーイング wellbeing に加ふるに感情的要素のウエルビーイング wellbeing を以てすべく、よく之を表明する言葉としてウエルフエーア welfare と譯すべしとす。ドイツのパウルゼンも亦同様の主張を爲し、グリュクゼーリヒカイト glückseligkeit の代りにウォールファール wohlfahrt の語を以てせり。實に幸福の意識には、必らずしも活動の意識を伴はずと雖も Eudaimonia はアリストテレスが譬へたる如く、活動を形とし、唯だ其の影とし

て快樂あるを稱するものなれば、之れを單なる幸福と譯するは當らざるなり。

されば吾人は易の生々自彊の活動に伴ふ特定の快樂、即ち幸福を以て孔子の活動主義となさんと欲するものなり。此くて孔子は消極主義退嬰主義らしき言辭之なきに非るも、其は其の本領に非ず。能く觀る者は之れを知るを得べきなり。此く觀來れば既に活動主義てふ此の言葉の中に多面多角の側面ありて其の解釋は頗る微妙複雑なるものあるを知るに足る。即ち或る側面より見れば、孔子の教は快樂主義とも、又た或る側面より見れば利用主義とも、更に又た或る側面より見れば克己主義とも説かれざるに非ず。而して此れ等學説は、縦横に討議せられて發展せし所なるが、特に我が邦に於て其の絢爛を見るといふは非か。

我が邦に於ける最も異彩ある一儒者山崎闇齋は、當時大勢力ありし大名たりし保科正之侯に寵遇せられ、君臣の交頗る厚かりき。

侯嘗て闇齋に問ひて曰く、先生樂あるか。答へて曰く臣に三樂あり。凡そ天地の間に生ある者何ぞ限らん、而して萬物の靈たるを得るは一樂なり。天地の間一治一亂定數なし、而して右文の世に生れ、書を讀み道を學び古の聖賢と臂を一堂の上に把るを得るは一樂なり。是れ臣が樂しむ所なり。侯曰く、二樂は既に之を聞くを得。請ふ亦た(他の)一樂を聞かん。(答へて)曰く、此れ其最も大なる者、而して言ひ難き所以のものは、侯必ず信せずして、以て毀譽誹謗と爲さん。侯曰く、寡人不敏と雖も先生の言を奉し、致々として諫を求めて忠言

を渴聞す、何爲れぞ今に至りて教を終らざるや。曰く、君の言此に及ぶ、臣假ひ戮辱に逢ふも、豈に言を盡さざらんや。所謂樂の最大なるものとは、幸ひにして卑賤に生れ、侯家に生れざることは是れなり。侯曰く、敢て問ふ何の謂ぞや。曰く、意ふに今の諸侯たるや、深宮の中に生れ、婦人の手に長じ、不學無術、聲色に徇ひ、遊戯に耽りて、而して之が臣たる者、主意を迎合して、其の爲す所は因て之を稱譽し、其の爲さざる所は因て之を非毀し、遂に本然の性をして枯亡消滅せしむ。其の卑賤の幼にして辛苦を嘗め、長じて事務を習ひ、師教へ友輔けて、以て其の智慮を益す者に視て何如と爲す。是れ臣の卑賤に生れて侯家に生れざるを樂の最大と爲す所以なり。是に於て侯茫然として自失し、嘆息して曰く、誠に先生の言の若しと。(先哲叢談)

是れ活動主義の徹底せるものなるが、辛苦艱難に生長したる闇齋にありて、是れ眞に其の確信たりしなり。而して一大諸侯たる保科侯が快く之れを肯定せしは、如何に我が上流にも此かる健全なる氣風の横溢せるかを知るに足る。而して此かる健實なる精神も亦た孔子の精神の延長ならずと言ふべからざるなり。

以上は主として主觀的側面より教の精神を説きたるものなるが、尙ほ客觀的目的より之れを論ぜんか、孔子の教が博愛主義なること吾人の曩きに説ける所なり(九六頁及び一〇七頁等)。

されど「博」とは何ぞや。萬物與我一體と言ふものあり、天地間一切の萬物を愛するが道德的行爲なるか。其は餘りに廣きに過ぐるこなきや。然らば有生物全體とすべきや。植物は凡て之れを

愛護すべきや。其は果して實行し得べきやといふに、其の不可能事たるは尤も明らかなり。思ふに、動物愛護の聲は既に疾くより聞かるる所なるも、其れとても亦た殆んど同様に廣きに過ぐるを見る。唯だ犬馬等の如き、特殊の性能を發揮するものに對しては、之れに一定の愛情を有するは極めて自然なるも、其れとても畢竟一種人類愛の反映に外ならざるに非ずや。少くとも「博」の字に一般の動物を含有すと爲すは、未だ之れを定論と爲し得べからざるなり。更に之れを人類一般と解するとせば如何。今日發達せる人類の常識として、如何なる人種人類に對しても之れを愛せざるは人道に反すとせざるはなかるべし。即ち、汝の敵をも愛すべしとする如くなれども、其は特別の場合、特殊の人にして始めて可能なるのみ。現在の事實としては、己れの從屬せざる國家以外の人々に對しては、生殺與奪は勝手たるべしの感なくばあらざるなり。暫らく此かる極端の場合を除くとも、平和裡にありて、吾人は如何にしてアフリカ内地に確かに生存するも更に其の面貌さへ知らざる概念的土人を愛すべきや。全人類を愛せんとするも、所謂全體は抽象的空想たるの外なしといふべし。是に於てベンザムは、「最大數」の語を以て「博」の字を解したるは、聊か實際的に近づきたるを覺ゆ。

されど愛に就ても尙ほ十分議論の餘地を存す。我が主觀的愛情の満足を愛と言はんか、老嫗の孫を甘やかす如きも、其れと言はざるべからず。愛を受くる者の實際に獲得する福利を言ふとせんか。一燈の供養を爲す外能はざる貧者は、何日も萬燈を提供する富者の如き愛を爲す能はざる道理なり。而して是れ古來學者の間論議の多く行はれたる所なり。されば之れを愛と云ひ愛と云ふも、實は尙ほ多大の研究を其の内に藏すといふを得べきなり。而して孔子の教は此の點に於て亦た其の輪廓を示すに止まると雖も、許多の聖人と共に確かに其の發題者なりといふべし。

上來述べ來りたる所によりて、吾人は實に孔子が其の民族過去の經驗を集大成したる聰明と學識とによりて、人類の進展すべき正しき大方針を指示したるを知る。然り、其は大方針なり。其の詳細は後日の研究を待つ。世には或は道德に於ては大方針の指示のみにて十分なり、其の綿密微細の研究の如きは害ありて益なしといふものあり。されど綿密微細なる研究こそ、道德をして益々精確適切ならしむるものにして、其れなければ、所謂大方針も茫漠として著實なる實行の把柄を得ることなく、徒らに人をして或は低迷し或は悲憤せしむるに至るにすぎず。特に世界の道德的情態が、遅々たりとは云へ、今日の進歩を遂げたるは、東西の學徒が普遍理の研究を遂げたるによると言はざるべからず。而して孔子は東洋に於ける其の學祖に非ることなきなり。

我が邦に於ける滅私奉公の模範たる武士道の精華四十七士、亦た比較的の小公を捨ててよく至正

の大公に就き以て維新の大業を翼賛達成せし諸藩の志士の如きも、山鹿素行其の他の儒家を通じて、多かれ少かれ皆孔子の精神の感化影響によらずと云はんや。

孔子は實に支那が生み、又た支那思想の精華を發揮したる一聖人なり。支那に於て累代之れを尊崇して或は大成至聖文宣先師とせられ、或は人爵的臭味を去つて、單に至聖先師とせらるるは眞に宜なりといふべし。されど今日の實情に徴すれば、支那人の孔子に對する尊崇は、多くは是れ表面的にして、其の事實上の實行は極端なる實利主義、陋劣なる他力主義、偏小なる利己主義なりと言はる。是れ我が日本人の孔子に對する態度の眞實味、眞劍味あると大に異なるものあるを見る。孔子の國の民衆が如何にして非孔子的となりしや。其所には幾多の歴史的事情因縁のありしことならんが亦た一大悲劇と云はざるべけんや。

吾人は普遍的の道によりて、一日も早く東亞の新秩序の到來を待望せずんばあらざるなり。

論語の組織的研究 終

跋

論語を註釋し研究せるもの既に多し。或は字義を闡明し或は異本を比較するが如き、所謂訓詁校勘に屬するものあり、或は其の趣旨を揣摩し或は其の教訓を敷衍するが如き、所謂義理大本に通じ經世修身に資せんとするものあり、精緻なる文献學的考證より卑近なる修養談に至るまで、一々之を列擧すれば眞に僕を更ふるもなほ及ばざる觀あり。然らば則ち今此書何を以てか其中に於て新に地歩を占めんとするか。蓋し考證愈々細に入つて字句の詮議に詳かなれば、往々其間の連絡を分離し、柄鑿相容れざるも顧みざるに至り、教訓を求むるに急なれば、屢意を以て迎へ、時に應じて解釋を二三にするに至ることなきを保せず。是に於てか別に全般を通觀し、其の中に貫通せる理路を覓めて末節を統括するの要あるや明なり。加ふるに從來聖人の至高を仰慕するの餘り、其の言説に就て一點の疑をも挾まざらんとし、其の教訓も亦時勢と外圍とに影響せらるゝことを忘るゝものまた少し

とせず。古來註疏の饒多にして其の説を異にするものあるは、既に更に又註疏を加ふるの餘地あることを示すものたり。古典の常に新研究を須つ所以のもの實に此に存す。

中島君深く哲學倫理學の根本を究め既に屢、西歐諸家の學說に就て評釋を試む。晩年心を東方聖賢の道に潜め、少時の漢學に關する素養を經とし、壯時の近代諸學に對する學習を緯とし、研鑽此に年あり。其の間、或は激務に従事し、又屢、重患に罹り、殆ど學事を廢するに至らんとせしも、鬱勃たる好學の念は毫も之が爲に累せらるゝ所なく、寸暇を偷み少康を捉へ、其の蘊蓄の一端を披瀝して世人を啓發し、更に其の研鑽を繼續して終に厯然たる大冊を成すに至る。嘗て左傳に據つて其時代の道德風俗を研究す、所謂道德史の問題に關するものにして、倫理學の實證的根據を提供するものたり。此の實證的知識を基礎とし、更に精細なる文獻考證に憑據し、論語一篇を爬羅抉剔して所謂温故知新の實を擧ぐ。一見散漫たる語録も此に至つて始めて條理ある體系を具備するを得、平凡なる常識と思はるゝものも深奥の意義を藏するものなること明にせらる。思ふに其の解釋の中間々舊説を離れ

て斯道の人を驚かすものあらんも、然も亦以て他山の石となるの望みなしとせず。況んや又因襲俗をなす見解に對して、全く繫縛を脱する如き意見に至つては、専門の人士も亦聞くべきもの少からざるべきをや。然れども此著は固より徒らに異を樹つるものに非ず、又漫りに一家の見を述ぶるものに非ず、汗牛充棟の諸註釋に就て博引旁證、苟くも據なければ妄りに斷案を下すことを避く。而して單に諸説を併列するを以て足れりとせず、究むべきは悉く究めて然も之に對して論辨することゝを怠らざるものなり。是故に讀者は此一書によつて、嘗に著者獨得の見解に接するのみならず、同時にまた種々古今の論著をも窺ふことを得、進んで之を著者の見解と比較することを得べし。即ち之を以て古典の新釋とすると共に古今の知見の集大成と目するも敢て過言ならずと謂ふべきなり。

著者稿を起してより既に數年、漸く業を卒へて既に其の一部を剞劂に託す。會、病革まつて遂に起たず、其の出版を見るに及ばずして、幽明界を異にするに至る。人生の恨事何ぞ之に若かんや。幸にして書肆其の業を續け、遂にこゝに完成公刊を見るに至る、亦以て故人の遺志に副ふを得たるものと謂ふべし。余もと斯學に

就て知る所極めて寡く、自ら序跋を書するの任に非ざるを知る。たと早く故人の知遇を受け長く學會の事を共にす。近時君に代つて此會の事を斡旋するの縁故を以て、既に此著の一節を乞ひて雑誌に掲載し、なほ出版繼續の業に贊助するを得たり、此書の完結に就て特に著者と喜を共にする所多し。乃ち一言を記して竊に故友の志を想ひ、敢て之を世間に告げて著者の意を傳へんとす。

昭和十五年十二月

文學博士 桑 木 嚴 翼

昭和十六年二月二十日 印刷
昭和十六年二月二十五日 發行

論語の組織的研究

定價 金三圓五拾錢

著 者

中 島 德 藏

發 行 者

東京市京橋區銀座一丁目五番地
大日本出版株式會社
代表者 杉 山 常 次 郎
取締役社長

印 刷 者

東京市神田區神保町一丁目三十四番地
高 田 壬 午 郎

發 行 所

東京市京橋區銀座一丁目五番地
大日本出版株式會社
振替口座 東京一三六二二五番

900
103

終